

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 26号

1997年 7月~ 9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 97' 夏 No26



剱大滝・急な岩稜からのA, B, C, D滝
《Photo by, TaKaKuWa》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

目標を持って山に行こう！

会員の皆様は現在、なにか目標をお持ちだろうか。私が聞きたいのは、お金をウン万円貯めるとか、土地を買うとか、家を建てるとかではない。山に関してのことである。何処の何々ルートに登りたいとか、何々沢を遡行したいとか、ヒマラヤ登山をしたいとかである。若手の連中をみていると、別に登りたい所があるわけじゃなし、先輩に行こうと誘われた所に行くだけ、といった山行をしているように見える。先般のリーダー会の席上で、なぜ今の若い連中はあまり山に行かないのかと尋ねたら、リーダーの一人から、それは山に行きたくないからですよ、と言う答えが返ってきた。えっと思わず会長と顔を見合わせてしまった。私が山岳会に入ったのは山に登りたいからだったのだが。いろいろ聞いてみると、山に行きたくないというのは、山にばっかり行きたくないという意味のようだ。ドライブしたり、海に行ったり、旅行をしたり、登山をしたり、いろいろしたいということなのだ。それは私もそうだからよく理解できる。でも私の場合は山の比重が大きかったので、山を一番優先させてきた。いや、させてきたのではなく、したかったからしてきただけ

で登ったかを聞くのはそのためである。このところルート図集の参考タイム以内で登ったという話を聞いたことがない。タイムレースではないのだから速く登れる必要はない、という考えの人がいたらそれは岩登りに関しては間違いである。たしかに速く登る必要はないが、速く登れる力がなければいけないのである。遅い人は動作が遅いのではなく、自分に自信がないため、躊躇している時間が多いだけなのである。それを克服するには、もっとフリークライミングを取り入れた練習をしなければいけないと思う。何でもあり大好き人間の私でも、既製ルートでフリーの個所にボルトを打ち込んだことは一度もない。既製ルートの中で、登れなければボルトを打てば良いという考えも間違いである。それとばかにならないのが、確保地点に着いてから確保体勢に入るまでの時間である。実に要領が悪くて、見ていてイライラする時がある。これもフリーや人工が遅いのもルートファインディングが悪いのも、すべて練習不足である。

友好団体の月報や会報を読んでいると、憧れのルートに行ったが敗退したので来週又アタックするとか、やっと何処どこルートを登ったので、次は何々ルートを登りたいとか、羨ましい若者がたくさんいる。そのルートは私が知っている限り、けして難しいルートで

だ。それは常に目標をもって、それに向かって進んできただけなのだが。その目標はどんどん変わる。一つの目標が達成されたときには次の目標ができていくのである。永年私の最大の目標だった剣沢が終わった。2カ月過ぎた今は次の目標ができていく。その目標は剣沢と比べると、とても小さい目標かもしれない。でもそれは現在、自分の年齢体力技術にあった目標といえる。自分の指向からいって岩登りや沢登りはやめられないだろうから、易しいルートの目標を定めている。会員の皆様も目標を作って戴きたい。それは6級ルートでも3級ルートでもイワナ釣りでもキノコ採りでも良い。目標に向かって真剣に取り組んでいる姿は美しいものである。

当会の若者を見ていると、山の勉強をしていない。だから山のことをあまり知らない。当然どんな山にどんな岩場があって、どんなルートがあるのかも知らないんだから目標など出てくる訳がないともいえる。ついでに苦言をもう一つ言わせていただく。当会は岩登りのクラブなのだから、もっと岩登りの実力をつけてほしい。一人ひとりの登り方を見ているわけではないが、どのルートをどのくらいの時間で登ったかで、その人の実力は見当がつく。私が必ずどのくらいの時間

はないのだが、真剣に山に向かって取り組んでいる様子が伝わり、すごく好感が持てるのである。そういう若者は絶対と言っていいくらい山行回数が多いし、山の勉強もしている。将来が有望である。当会にもそのような若者がたくさんほしいものだ。友好団体とは関係ないが、百名山完登目指して毎週山に通っている人の是々非々は別として、目標に向かって邁進しているその姿をみると、その人達の爪の垢を煎じて飲ませてやりたい若者が当会には何人もいる。

当会はこれまで岩登り、沢登り、冬山等そのすべてを志す若者を求めてきた。沢登りだけとか、冬山はやりたくないという人は入会を断ってきた。しかし、パートナー不足の現在、そのままでもいいだろうか。当会は岩登り中心の偏ったクラブである。会の創立理念がそのような基に作られたのだからしかたがないが、前述した、山ばかり行きたくないと同じように、岩ばかりは行きたくないという人もいると思う。当然岩登りがしたくて当会に入ったのだと思うが、そのような人がいても不思議はない。いつもビフテキばかりでは飽きてしまう。たまには野菜炒めやお茶づけが食いたくなるものである。もっと幅広く、年齢制限をゆるめ、沢登りだけ、無雪期だけという人も入れても良いのではなかろうかと思うようになってきた。創立当時は10名足

らずの会員だったがパートナーに不足はしなかった。それは全員が一丸となって活動していたからだ。それが今は20名いてもパートナーに事欠いている。いまさら昔のことを話してもしょうがない。パートナー不足を解消する方法は、なんとかして会員を増やすしかないと思うのだからだろうか。

最後に現会員に要望として、クラブに何をしてもらうのかばかりではなく、クラブのために何ができるのかを考え、少しでもクラブの活性化に尽力して戴きたい。どんなことをすれば良いのかわからない、という人のために答えも出しておく。その答えは実に簡単で、もっともっと山に行けば良いのである。

(本図一統)



《目次》

1997年 夏号 7月～9月 ACC-J 茨城

巻頭言	・・・ 1
集会報告	・・・ 4
山行報告	・・・ 5
甲斐駒ヶ岳・赤石沢奥壁	・・・ 6
易老沢	・・・ 7
谷川岳・中央稜～ツブ状岩壁緑ルート1P	・・・ 7
唐沢岳幕岩・大凹角ルート	・・・ 8
奥多摩・倉沢谷本谷・塩地谷	・・・ 10
滝谷集中登攀	・・・ 11
パキスタン・カラコルム紀行《前編》	
＝ディラン・ラカボシトBCレッキング＝	・・・ 14
剣沢遡行	・・・ 23
鋸岳	・・・ 29
奥多摩・日原川・唐松谷	・・・ 29
黒部・下の廊下	・・・ 30
鷹巣谷	・・・ 31
丸山東壁	・・・ 32
実川・硫黄沢	・・・ 33
剣沢大滝を終えて	・・・ 35
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・ 39
編集後記	・・・ 41

表紙絵…モレーンの頂上からミナビン氷河とディラン峰を望む。

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 7 月 】-----

7月 2日

出席者 本図、古山、紺野、笹平、高木、村上、新美、坂本(寛)、告、菊池、木村、石塚、中居

7月16日

出席者 鯉河、菊池、木村、古山、紺野、告、村上、中居、笹平、新美、高木

7月30日

出席者 本図、木村、古山、新美、菊池、村上、笹平、鯉河

-----【 8 月 】-----

8月20日

出席者 本図、木村、菊池、古山、新美、木村、告、笹平、中居、石塚、坂本(寛)

-----【 9 月 】-----

9月 3日

出席者 本図、菊池、古山、村上、笹平、坂本(寛)、告、新美、中居

9月10日 《リーダー会》

出席者 本図、木村、鯉河、古山、菊池、告、笹平

9月17日

出席者 本図、古山、村上、菊池、木村、笹平、告、新美、坂本(寛)

山行報告

《 1997年 7月～9月 》

---【 7月 】---

7月 6日	《会山行》古賀志山（岩トレ）	L 古山、告、中居、笹平、新美、坂本(畠)、高木
7月19～21日	甲斐駒ヶ岳・赤石沢奥壁	L 古山、新美
	・奥壁中央稜	// //
	・白稜～赤グモ（Aフランケ）	// //
	・奥壁左ルンゼ3Pまで	// //
7月20～21日	南ア・遠山川・易老沢	L 中居、坂本(畠)

---【 8月 】---

8月 3日	谷川岳・一の倉沢	
	・中央稜～コップ緑ルート1P	L 本図、古山、笹平
8月9～11日	唐沢岳・幕岩（大凹角ルート）	L 古山、中居
8月 10日	倉沢谷本流・塩地谷	L 本図、高木
8月13～17日	《夏合宿》穂高滝谷	L 古山、告、笹平、新美
	・クラック尾根～一尾根（ノーマルルート）	// // //
	・3尾根～ドーム中央稜	// // //
	・4尾根～ツルム正面	// // //
8月15～24日	パキスタン・カラコルムトレッキング	生井、他4名
8月29～9月1日	剣大滝	本図、他1名
8月30～31日	鋸岳	古山

---【 9月 】---

9月 7日	《会山行》唐松谷	L 本図、古山、中居、告、笹平、新美、坂本(畠)、石塚
9月13～14日	黒部・下の廊下	L 古山、笹平
9月 21日	鷹巣谷	L 本図、紺野、他1名
9月21～23日	丸山東壁	L 古山、告
	・右岩稜2P	// //
	・緑ルート	// //
9月 28日	実川・硫黄沢	L 本図、坂本(畠)、坂本(昭)

甲斐駒ヶ岳・赤石沢奥壁

1997. 7. 21~23

パーティ L 古山正文、新美達也

約5時間かけてようやく取り付きに至る事を考えると、ザックの中の登攀具の重さもさる事ながら、気持ちの方が更に重たくなる。ただ黙々と歩くだけで、楽しみは何もない。7合目の小屋で休んで、ようやく8合目の鳥居に着いた。ここから50メートル位行くと登山道の脇に岩小屋があった。岩小屋近くの広場でルエルトを張ってさっそく奥壁中央稜に向かう。岩小屋前の踏み跡をトラバース気味に進んで、岩の張り出したところにチムニーがありそこが取り付きとすぐに判った。出だしのチムニーは、奥にホールドがあるがそれをとるとザックが邪魔になり登れないし、外にはホールドがないので苦勞して登り、灌木でビレー。次は左にトラバースして木登りで、踏み跡のある樹林帯に入りビレー。ここまですが通常の1Pの様だ。樹林帯の踏み跡をコンテで進み、正面の岩壁の基部に達した。出だして1回あぶみを使ったが、以後4Pつるべで順調に登り終了。まずは1ルート星2

つをget。ここから樹林帯の中の弱々しい踏み跡を進んで、登山道に出る直前の10数メートルの岩場で再びロープで確保して登り、登山道に出た。ここから20分程でビバーク地に戻れた。軽量化の為シュラフを持たずカバーだけだったので、夜は少し寒かった。

次の日は、Aフランケ赤蜘蛛ルートの取り付きを目指し、岩小屋前から急な踏み跡を下る。Aフランケの頭の岩小屋で（その時はここがそれとは判らず、登攀終了後に登ってきて初めて判った。）降り口が判らず、迷ってBフランケ基部の方に降りかけたりしてしまった。左（上からみて）の7丈沢に下って、沢からはなれ、再び沢床に戻り、トラバースして行くと今度は赤石沢本谷に下降していることが判り、これだとルートの取り付きまで200メートルほどロープをだして登り返すらしいので、7丈沢まで戻り注意しながら更に登り返すと、沢に降りる手前にトラバースする所があり、ようやくAフランケの見える所に出た。しかし、なかなか取り付きに近づけず、岩壁の基部に沿って進みフィックスロープにぶら下がり降りたりして、よ



Aフランケ・赤ぐもルートの出だし

うやく着いたときには7パーティ目で一番最後だった。そこですぐ右の白稜会ルートで4P登って、先行パーティを追越し、赤蜘蛛ルートと交差する大テラスまで一気にごぼう抜きだ、などと考えて、白稜会ルートに取り付きが完全な人工ルートのため、ピッチが上がらず大テラスでは、結局やっぱりビリだった。大テラス上の2P目はフレンズの掛け替えによる人工A1らしく、だいぶ待たされた。ここで再び色気を出して白稜会ルートに転戦し1P登るが、時間切れになりそうなので、懸垂で戻って、結局赤蜘蛛ルートを登った。そのA1はフレンズ3つセットしての人工でルート図には載ってないが今日このルートに取り付いたパーティには周知の事らしくった。暗くなる前に終了し、Aフランケの頭まで登り、この岩小屋がAフランケ頭の岩小屋であることが判った。へっ電では判らなくなる

恐れが合ったので、朝迷いながら下ってきた来た道を、登り返してビバーク地に戻った。とりあえず1本登って、星2つ get。

最終日は、奥壁の左ルンゼを登ってから下山という少々ハードな予定だった。取り付きから見えている左ルンゼは水が流れていなければルンゼとは判らないくらいだった。水流右の壁に沿った所を1P人工主体で登り、2Pは水流溝沿いに登って大テラスに達した。ここで、新美君にトップを交代。しかし、その理由はなんとも間の抜けた理由なのだが、出だしで落ちてし

まった。足を打ったらしいので、登攀中止にして下った。足を引きずって痛そうだったが、なんとか下山でき、ほっとした。勝沼から奥多摩回りでつくばに戻った。赤石沢奥壁は簡単なルートが少なく中上級者向きの岩場であろう。そして更にアプローチは超上級者向きだ。アプローチが遠いよー。

(古山 記)

易老沢

1997. 7. 20~21

パーティ L 中居康展、坂本恵美子

易老沢の出合から二俣までは、30分くらいの川原歩きだったけれど、こんな所でもこれは初めてだなというものがあった。それは岩から岩へほんのちょびり飛び移る事で、これは慣れるまでは立ち止まってその場をひとまず眺めたりしていた。

この辺りは幕営地によさそうな所が色々合った。左俣に入ると直ぐに人工物があり、おやまあと言う感じだった。滝も多くて溪相は素晴らしく良かった。ただ高巻きはひたすら長く、沢に來たのを忘れてしまい

そうだった。

稜線に出てから山頂までは途中水場で休みつつ、2時間ほど登った。その日は山頂直下の山小屋の管理するテント場で過ごし、翌日は一般道を易老岳、面平を経て下山した。

(坂本 恵 記)

谷川岳 中央稜～コップ状岩壁緑ルート 1P

1997. 8. 3

パーティ L 古山正文、本図一統、笹平孝

最近、山に行っていないので、そろそろ行っておかないとまずいと思い、今回の岩登りに行く事にした。

昨年、一の倉沢には雪渓がたくさん残っていたが今年は残っていなかったのでヒョングリの滝の所を通って行った。テールリッジの所は段差がきつくて直ぐに疲れてしまう。何とか古山さんの後をついて行くと、服は汗で濡れて喉が渇いてしまった。

取り付きに着くと、回りには人は余りいなかった。8月の時期は暑過ぎて他の山に行ってしまうからだった。この日もかなり暑くてズボンを捲り上げて登った。今回は、特にザイルが流れるようにランナーとザイルに注意をしながら行く事にした。1P、2P、は簡単に行けた。3P、4PはA0なのでフリーで行ってやろうと思うが、結局A0で行ってしまった。5P目の所で少しルートを間違えてしまったが、特に問題なく行けた。衝立の頭に出てからコップ広場に懸垂下降しており、そこで昼食してから緑ルートに取り付いた。古山さんがトップで行った。ハングの出口の所でボル

トを一本打っていった。その後本図さんと私が登り始めた。本図さんは簡単に行ってしまうけど私の方は思うように進まなくなって来てフィフで何回も休みながらやっとテラスまで辿り着けた。A2がこれほど難しいとは想像もしていなかった。かなり時間をかけてしまったので、ここでタイムオーバーになった。

コップスラブを降りて行くと雲行きが悪くなってきて雷と大雨になった。カミナリ響く中逃げるようにして略奪点まで降りて、ザイルをザックの中に押し込んで、増水した沢を下って行った。本谷の所に着くとかかなり増水していて何パーティか立ち往生していた幾ら待っても水が減らないので、やぶこぎをして出合まで辿り着いた。

出合(5:28)ー取り付き(6:43~7:09)ーコップ広場
(10:38~11:24)ー出合(18:00)

(笹平 記)

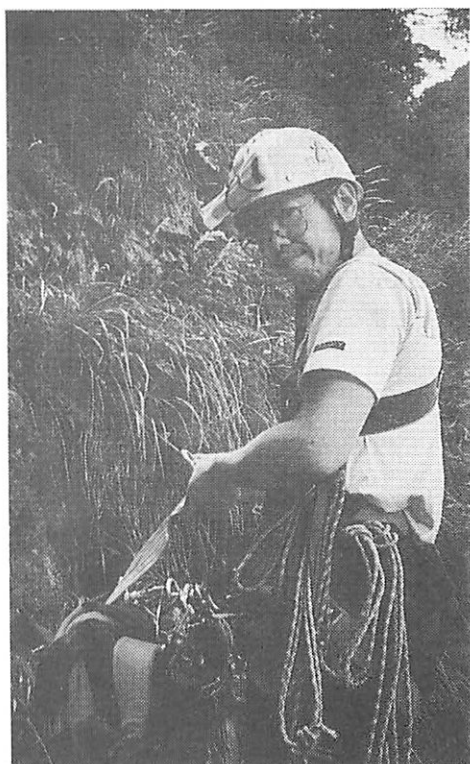
唐沢岳幕岩 大凹角ルート

1997. 8. 9~11

パーティ L 古山正文、仲居康展

夏休みの予定を古山教授に連絡すると、留守番電話に唐沢岳幕岩に行こうとメッセージが入っていた。果たしてこのなまりきった体で登れるだろうか、と不安ばかり先行するが行くことを承諾し、いそいそと準備した。

果たして、天気予報はまあまあの様である。関越から上信越道を経由して葛温泉に車を止める。下界では連日の熱帯夜であるが、ここまで来ればむしろ肌寒いくらいである。テントを張って仮眠をとる。夜が明けてみると軽く雨が降っていたように全体にしっとりした気配である。早々に荷物をまとめ出発する。この道はかつて北鎌尾根を友人と二人で登った時に歩いた道である。かれこれ7年前になる。古い記憶の中には高瀬ダムの上から振り返った時に、小さな崖の様な岩場が見えた覚えがある。あれが幕岩だったのかな、と少々思いながら唐沢を詰める。金時の滝を大きく高巻くが、この高巻きは案外に悪い。ワシの滝を巻いて少しで大町の宿に着くはずである



が、B沢を詰めすぎて悪い草付きをトラバースする羽目になった。広島宿を見つけると同時に大町の宿が見つかった。大町の宿はなるほど話に聞く通り快適な岩小屋で、ゆうゆうテントが張れる上にすぐ隣に水場はあるわ、その気になれば人工登攀の練習場にはなってるわで、まさに幕岩登攀の基地として最高である。テントを張るまでに少々時間を食ってしまったが、当初の目的である大凹角ルートに向かう。

登りだしたのは既に正午前である。天気はまあまあであるが、夜の内に降った雨でルートはびしょびしょである。遠目よりもずっと草付きは多い。しかもその名の通り凹角にルートはあり、沢靴が欲しくなるようなところであった。凹角ルートは幕岩の中でも比較的登られているようだが、それでも残置は腐ったものが多い。1ピッチ目は簡単なフエースから人工で凹角を越える。そのままつるべで登るが2ピッチ目のスラブも易しいくせに濡れていていやらしい。3ピッチ目はビレイしていてもびしょ濡れになる洞穴状のハングを越える。この辺りから高度感がではじめ、調子が上が

幕岩にて…古山氏

ってくる。流水溝のようなジェードル、スラブから濡れた草付き、藪こぎの末に最後の大凹角に達する。ここは凹角の右手を人工で越え、濡れたバンドを左に登って、湿っぽい広いチムニーの中に入る。最後は人工から高度感のあるフリークライミングで右稜の頭に直接でる。登り切った時点で夕方5時。初めてのルート下降である。壁が大きく懸垂下降も容易ではない。下降ルートは明瞭であるが、7ピッチの懸垂で右稜のコルに着いた時は真っ暗になる頃であった。最後の2ピッチくらいから雨が降り始めた。ヘッドランプをつけて大町の宿に戻る。夕方からの雨は夜の内に更に強くなった。翌朝も雨降り、午後になって少しガスが晴れてきた。B沢に1パーティテントを張っているのが見えた。草付きが多く、しかもスラブが主体なので一度雨が降ると当分快適

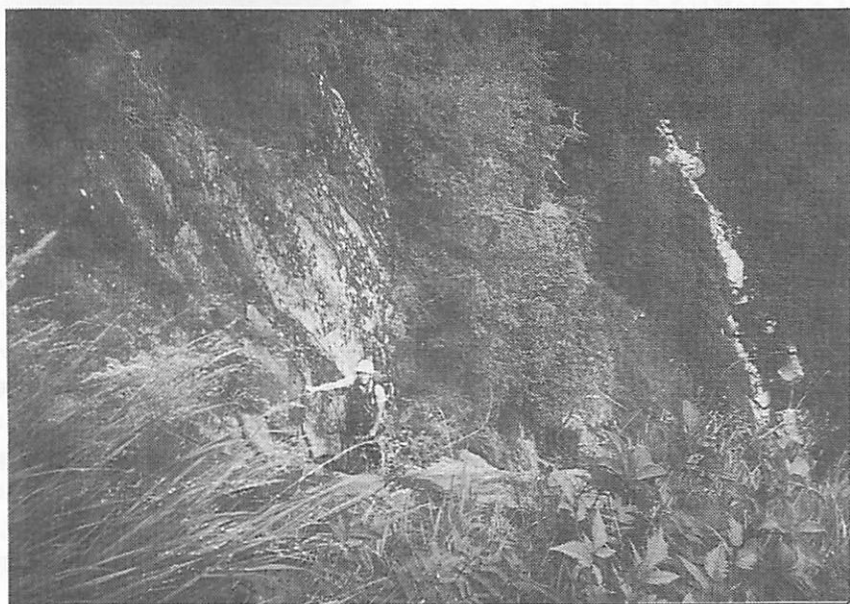
な登攀は望めそうもない。この日は1日中寝たり起きたりであった。

翌朝、空には星が見えていたので天気は大丈夫そうだ。装備を詰めて松本ルートに向かう。大洞穴ハングの手前、早速濡れたスラブでザイルを出す。ここで出鼻をくじくように雨が降り始める。自分はすっかり登攀意欲を失っているが、古山さんはそれでも登るつもりで、濡れたスラブをフィックスロープにユマールをかけて登っていく。最近はずっかり弱気になって、ちょっとでも条件が悪いと泣きが入ってしまう。我ながら情けない限りである。浹々取り付きまでついていくが、結局ここで雨が降り始めて敗退となった。

下りとなるといやというほど早い。下りでは金時の滝はルンゼをフィックスを使って下りた。こちらの方が断然早い。結局3日間で1本しか登れなかった。基本的に壁自体が大きく、アプローチがいいとはいえ、どのルートに登るにも1日仕事となってしまう。大町

で温泉に浸かって、そばを食って筑波に帰った。この3日の間、山は雨ばかりであったが、下界は猛烈な暑さだったようだ。いろいろと反省点の多い山行であった。

(仲居 記)



幕岩にて

奥多摩 倉沢谷本谷 塩地谷

1997. 8. 10

パーティ L 本図一統 高木博行

お盆前の日曜日、奥多摩へ沢登りに行くことになった。奥多摩のイメージとして気軽に行ける流程の短いやさしい沢とのイメージを持っていたので、装備も軽い気持ちでザックに詰め込んで出かけたがこれを後に後悔する羽目になる。奥多摩駅の横を日原川沿いに進むと倉沢橋が架かり、これを渡った林道入り口にて駐車、いつものように酒を呑み就寝となる。翌日、朝8時に出発。本図さんからもらった資料によると、入渓点の少し下流に奥多摩最難の悪場として恐れられたマイモズの悪場というゴルジュらしき場所があるらしい。見に行こうとなり下降して行くが悪場らしき場所はないと拍子抜け、上流へと遡行を始める。これといった難しい所も無く滝はなるべく巻かずに登るように心掛ける。しかし盛夏とはいえ最初に泳ぐ時には冷たく後ずさりしてしまう。途中釣り人やキャンプをしている家族連れ、若者のグループなどいろいろな人々と出会う。みんな右岸上を通る倉沢林道から下りてくるらしく、それぞれの休日をいろいろなレジャーですごしている。ヘルメットをかぶりハーネスを身に付けているのが少し恥ずかしい。いつも思うのだが、

沢中で人に会おうと少しがっかりするのは自分が欲張りで沢の自然とイワナなどを独り占めにしようともくろんでいるからかもしれない。小滝をいくつか越えていくと左岸の岩場に鍾乳洞が見えてきた。さっそく洞窟探検隊となる。入り口にはディバックやノートが二人分置いてあり先客がいるようだが、中からは物音一つ聞こえてこない。真っ暗な穴の中へ入っていくと夏だというのに寒いくらいだ。本図さんはだいたい奥まで探検にいったようだが、自分はコウモリやムカデでも出てきそうで気味が悪くなり早々に退却する。寒く暗い洞窟から這い出すとすぐに魚留橋が架かる。これより上流は塩地谷と長尾谷に分かれ、自分たちは塩地谷へとむかう。小滝をいくつか越えると15m地蔵ノ滝に行く手を阻まれる。直登は無理なので右岸から高巻く。その上の6m滝は遡行図では巻いているが直登を試みる。流水の中にホールドをもとめシャワーを浴びながら落口まで登るが、最後でホールドがなく残念ながら敗退。続く6mハング滝は乾いた左壁に登れそうな気がしたが、大事をとって高巻くと上流は所々小滝があるていどでやがて水も細くなり、水筒に水を補給

し沢をつめていく。最後はバテバテで一杯水の水場へたどりつく。登攀具をしまい東日原への登山道を歩き始めるとすぐに一杯水避難小屋が建っていた。小屋の前のテーブルには中年の登山者が一人、琥珀色の液体を飲んでいる。話を聞くと今日はここで泊まるらしい。他に登山者もおらず、小屋は貸し切りのようだ。この時はまだ本図さんも自分もこれからの下りがまさか苦しいものになるとは思ってもよらなかった。東日原への登山道を下りはじめてすぐ、まずは本図さんの脚がつったのだ。本図さんほどの登山家でもこんなことがあるんだと逆に感心してしまった。何回かストレッチングやマッサージをするうちに本図さんの脚は治ったようだ。すると今度は自分の足の爪が痛みだした。たかが奥多摩と馬鹿にして運動靴をもってこなかったのが溪流シューズの先に親指の爪があたり痛みだしたのだ。後ろ向きや横向きに歩いてごまかしながら東日原へ辿り着いたが車のある倉沢橋はまだ遠くやっとの思いで車に辿り着いた時には沢をつめて登山道にでたときよりもホットした。必要な物と不必要な物をよく考えて装備を準備しなければとつくづく感じた一日でした。

倉沢橋(8:00) - 一杯水(14:00) - 東日原(16:00) - 倉沢橋(16:30)

(高木 記)

滝谷登攀

1997. 8. 13~17

パーティ L 古山正文、告広道、笹平孝、新美達也

8/13 (水)

天気予報はあまりバツとしない事を言っていたけれど、とりあえず上高地は晴れ。新装になった河童橋を横目で観ながら出発した。当初は潤沢とまりの予定だったが、『明日が楽だから』との古山さんの悪魔のささやきで北穂南稜のテント場まで行くことに。途中、雨にも降られて、結構疲れた。

上高地(8:30)ー南稜テント場(16:30)

8/14 (木)

二日目は、去年の雪辱のクラック尾根および第一尾根ノーマルルートであった。朝方ガスがかかっていて出発が少し遅くなったが心配していた雨はなさそうである。

古山さん・笹平さん組と告さん・新美組で登ることになった。ガレガレのB沢を下降し、見覚えのあるトラバース地点に到着。そこからザイルを一杯まで伸ばして、去年見つけれ

れなかったクラック尾根の取り付け点を古山さんが確実に見つけた。そこから登りはじめたが、とにかく岩が脆く、乗せるスタンス、つかむホールドどれもこれも信用できない。1ピッチ目から大きな落石をおこして下にいた人に怒鳴られた。3ピッチ登って、去年撤退した眼鏡のコルに出た。次のピッチをトップで行ったが、セカンドの告さんがなかなか上がってこない。しかもハーケンの音までするので、何やっているのかなーと思っていると、去年残していったハーケンを回収してきたとのことだった。核心のジャンケンクラックを抜けたあと、4ピッチ登って北穂小屋に到着した。

一休みして、再びB沢を下降してクラック尾根取り付け点からさらに回り込み、今度は第一尾根ノーマルルートに取り付いた。下部のCフェースは2ピッチ目の登り口が判りにくい。また3ピッチ目の凹角が出口がハング気味で結構難しかった。上部は下部にも増して岩が脆く、乗っている岩を足で叩くとボコボコと愉快な音がして見た目よりもずっと緊張させられたが、



クラック尾根・ジャンケンクラック手前

無事突破して北峰に出た。ペースが南稜だとやはり気分が非常に楽に感じた。

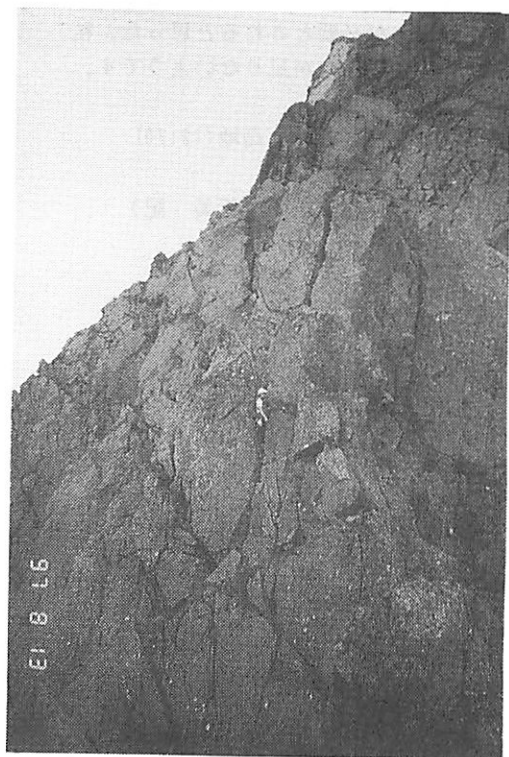
南稜テント場(6:30)ークラック尾根取り付け(7:20)ークラック尾根終了・北穂小屋(11:30)ーノーマルルート取り付け(12:30)ーノーマルルート終了・北穂小屋(16:55)

8/15 (金)

三日目は、第三尾根・ドーム中央稜とドーム北壁の予定だった。C沢を下降したが、B沢よりも崩壊していて緊張の連続。ここを落石なしに行ける人は空中浮遊できる人だろう。途中で一回短い懸垂下降あり。左俣から右俣にまわりこんですこし登ったところから取り付けであった。尾根に出るまでのルンゼは

やはりここもガレガレで「通常ノーザイルで」と書いてあったが当然ザイルを出した。尾根に出て一ピッチ登ると小ピナクルから大ピナクルに移る所があるが、隙間が広がってしまってほとんど飛び移らなければならない状況で、さらにその先のフェースも高度感があり緊張する。Ⅲ+になっていたけれど恐怖感は一Vぐらいに感じた。その後は岩稜を登って行くが、やや登りすぎてしまい、一ピッチ懸垂下降してドーム中央稜に出た。ここは「明るい雰囲気、快適なルート」との事。確かに他の所よりは岩は堅かった（あくまでも滝谷の中ではの話だが）。1ピッチ目をリードした笹平さんは下から見ていてとてもかっこよかった。ここは4ピッチとも結構難しかったが、先に登っていた古山さん・笹平さん組が要所にシュリングなどを残しておいたので、私がトップの時はそれをありがたく使わせていただいた。最後凹角を抜けてドームの頭に出て終了。

この日はここで時間切れとなり、ドーム北壁には行けなかった。



南稜テント場(6:30)―第三尾根取り付き(8:40)―ドーム中央稜取り付き(11:30)―ドーム中央稜終了(15:10)―南稜テント場(15:40)

8/16(土)

この日は、第四尾根・ツルム正面壁の予定であった。前日に引き続きC沢を下降すると思うとゾットしたが、慣れたせいか比較的スムーズに下れた。尾根に上がった所で順番待ちになったが、スノーコルまでノーザイルで行きそこから取り付いた。3ピッチ登った後で懸垂下降しツルム正面壁に出た。ここから二本のラインが見えていて、どちらが正しいかしばらく（私を除く三人で）議論していたが、古山さんの

『こっちだ!』

の一声で左側のラインに取り付いた。結局それが正しいルートで、改めて古山さんのルートファインディングの正確さを思い知った。二ピッチ目が今回初めての人工のピッチだった。それほど難しくは無いがガスがかかってきて先が見えず、ここでもトップを正確に引いていった古山さんのコース読みの正確さに感心させられた（それにしても淵沢側が暗れて

クラック尾根にて

いても滝谷はガスがかかり寒々しい印象を与える）。5ピッチ目で電光クラックの左側を人工で登りピナクルの上に出て、再び第四尾根に合流、最後のDカンテにとりついた。二ピッチ目は私がトップを引いたのだが、ルートファインディングに失敗、さんざん時間をとってしまった。そのせいで、終了したのは16:00となり、当初の予定では淵沢まで下る予定だったが、結局南稜どまりになってしまった。みなさますいません。

南稜テント場(5:30)―第四尾根コル(6:45-7:30)―スノーコル(7:30)―ツルム正面取り付き点(9:30-10:30)―第四尾根合流(14:10)―第四尾根終了(16:00)―南稜テント場(16:30)

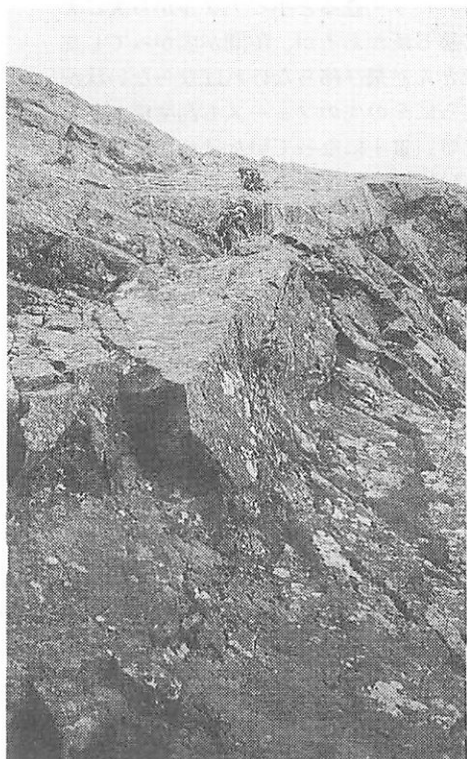
8/17(日)

前日に淵沢まで下れなかった為に、この日一挙に上高地までかけ下った。おかげで膝が笑った。帰りの高速は拍子抜けするほどすいていた。

3日間通して登攀中は全く雨は降らず、予想外の好天だった。滝谷は、岩が脆い、日が射さない、ルートファインディングがかなり難しい、ということでただ登るだけでなく総合力が必要とされると思った。私はまだまだ全然修行が足りないようです。

南稜テント場(6:30)―上高地(12:30)

(新美 記)



ツルム正面壁・最終ピッチを行く古山、笹平



ツルム正面壁・最終ピッチにて…古山

パキスタン・カラコルム紀行 《前編》

ニディラン・ラカポシBCトレックニ

1997. 8. 15~24

パーティ L 中村昌之、イムラン・ベイ、高橋健二、福永明子、生井一男

この紀行文は、海外軟弱山行（山旅）の記録です。ハードに尚かつエキスパートを目指す人には、とてもお勧め出来ない記録です。何もする事が無い時、暇つぶし程度に読んでいただけたら幸いです。

…著者より…

何と無く、パキスタン・カラコルムに興味を持ち始めたのは、昨年のエベレスト展望トレック（ナムチェバザール〜タンポチェ）に行った時、シャンポチェで知り合った人と酒を飲んでいて彼が、

『パキスタンの山は、一つ一つがとても大きく迫力があって、とても日本の山とは比べられない程スケールが違うんだ』

と熱っぽく話していた事が始まりだった気がする。彼は、私が仲間とシャンポチェのロッジや、ルクラ飛行場のレストランとかで寛いでいると、何処からともなく現れては山の話や雑談等を話しては消えるように去って行く本当に不思議な人だった。

そんな彼に影響されたという訳でもないが、体の具

合も良い感じだし、夏休みはどうしようかと思っていた。会の夏合宿は滝谷に行くと言っていたが、今の私の状態では足手まといになりそうで（邪魔者扱いにされるのも悔しいので）、参加できない。

それじゃ、一人海外へと思い会社に長期休暇をもらい海外に行く事にした。こんな事が出来るのも独り身の自由さである。

さてと、行き先の候補にあがったのはキリマンジャロ登頂とアンボセリ・マサイマラ動物サファリ。デマバンド登頂。そして、ボリビアアンデス、コンドリリ（4,658m）、ワイナポシ（6,088）のトレック、インカ帝国の探訪、チチカカ湖周遊の旅。とあったが、やっぱりパキスタン・カラコルムが気になる。結局、休暇日数、ベストシーズン期間、経費等の問題からパキスタン・カラコルムにあるディラン・ラカポシのトレッキングに行く事に決めた。

海外トレッキングも今回で第2弾になるが、今回の地域は詳しい文献を読んでいないので、未知の世界で

ある。何も予備知識が無いのも、また一興かなと思いつつ渡航の準備を進めた。

準備も整ってきたある日、アトラス（旅行会社）から突然、電話がかかってきた。話の内容はどうもここに来てキャンセルが相次いでおり参加人数が激減し、何と私を含め3人になったとの事と、成田ではアトラスの中村という係員が待機しているとの事だった。

『待てよ？、3人じゃ、ツアーリーダーは付かないんじゃないかい？、勝手に行き来してくれってっか』と頭の中で思い廻らせてしまった。でも、後でこの事が私にとってはホテルの部屋が、ツインもしくはダブルをゆったりと一人で使う事が出来るという特典が付き、また人数が少ないので機動力も有り、融通もきき、メンバーともとても仲良くなれ、とてもラッキーな事態でもあったのでした。

8/15。何時ものように成田発である。海外も今回で3度目である。以前行ったヨーロッパアルプスは個人旅行で20日間、全てを自分で行なわなければいけなかったのが結構大変だったが、一人の旅立ちといってもツアーなので気楽である。でも、どうせ俺の旅

は何かハブニングがあるだろうと思うけど、まあ、それもちょっとした楽しみでもある。

成田空港に10時過ぎに着き、早速USAパーキングに車を預け、第2ターミナルまで送ってもらう。あと二人はどんな人だろうと思いつながら（多分、恋人同士か夫婦だろうと思っていたが）、G-30のカウンターで待つこと少々、アトラスの中村さんが声をかけてきた。この人が、今回のツアーリーダーみたいで、3人でもツアーリーダーはつくようだ。そして、待望の2人がやってきた。男女一組、いわゆる恋人同士という関係らしい。いかにも私は邪魔者という感じである。まあ、余り邪魔にならないように同行しよう。

搭乗時間までまだ1時間ぐらあるので、空港内を一人ブラブラして時間をつぶし、集合場所に帰るとツアーリーダーの中村さんが、

『パキスタンエア（PIA）が、機体トラブルで北京にて調整している為、6~7時間程遅れるそうです』と言ってきた。いきなり、初っぱなからトラブルである。これには参ってしまった。仕方がない、飛行機が来るまで待機である。ここに居ても仕方がないので、午後4時半にもう一度集まる事にして、中村さんに昼

食券をもらい分散した。

お昼は何処も込んでいるだろうと、時間をずらし一人で昼飯を済ませてから、南口のゲートの脇の休憩所で、一人椅子に腰掛けて待機である。こんな時にと文庫本を何冊か持ってきた。その中の一冊「たった一人の生還“タカ号”漂流27日間の闘い」を読んで時間をつぶす。私はヨットの事は余り知らないが憧れはあった。男なら坂本龍馬の様に帆船で大海に繰り出したいという気持ちは誰でもあるだろう。海は好きなので本を読んでいても実際の光景が脳裏に浮かんでくるようで没頭してしまった。

フット、気がついてみると時計は2時半をまわっていた。ひと時より大分人並みは減ったような感じだ。ボ～と人並みを眺めていたら見たことのある人が、『どうも！』

と挨拶をして近づいて来る。一瞬、

『誰だ！、何処かで見たような気がするなあ…？』

と思ったが、何の事は無いツアーリーダーの中村さんだった。お互い話し相手が見つかり、待ち時間を有効に過ごす。雑談をしていて知ったのだが、中村さんはアトラストレックの社員では無く“夏山ジョイ、ネパールトレッキング、山と渓谷”等の本の編集、掲載写真の仕事を手掛けたフリーの山岳カメラマン&ライター

だという事だ。彼の話しではアトラスの社員でツアーリーダーは3分の1位だという。他のツアーリーダーは中村さんのようにアトラスに委託されて行なっているとの事。話していても何の違和感も無く、何だか昔から知っていたような気がしてならない。不思議な気分である。

集合時間が近づいてきたので、中村さんはPIAの状況が気になるらしくアトラスに電話をして

『ちょっとPIAカウンターに行って状況を聞いてきますね』

とバキスタンエアーのカウンターに行ってしまった。しばらくして戻って来ると

『悪いお知らせです。PIAは来るような感じではないです。ちなみにこんな物を頂きました』

と言ってホテルの宿泊券を見せてくれた。

『あちゃ！冗談じゃないぜ』

と心の中で思ったが、来ないものは仕方がない。

結局、初日はPIAが手配したセントラーゼ成田ホテルに宿泊する羽目になってしまった。

初日からのトラブルで、調子が狂ってしまったが気を取り直して、眠りに着いた。

8/16。24時間遅れの12:55発、PK85

1便でようやく成田を飛び立った。この時点で最終日のエアーサファリ(K2、ナンガーバルバット等の観光フライト)が、実行不可能になってしまった。フライト料は返金されるが、楽しみの一つだったので残念である。

順調にバキスタンエアーは飛行し途中、北京で給油の為に立ち寄り、イスラマバード空港に着いたのは現地時間の夜の8時15分だった。飛行機から降りたバキスタンのファーストインプレッションは、とにかく“暑っ～い！”だった。しかし、タラップを降り、バスで空港施設に行けば涼しいだろうと考えていた。が、その思いはあっさり裏切られてしまった。施設内で動いていたのは、日本にもウン十年昔にあった壁掛け扇風機。それが数十機回っていた。その扇風機の風がまた熱風になっている感じでとても涼しいといえなかった。

『ありゃりゃ、えらい所に来ちゃったなあ、この先大丈夫だろうか？』

と今回も何か波乱が待ち受けているんじゃないかとの思いが脳裏を過るのだった。しかし、来てしまったものは仕方ないと入国審査を終え、荷物を持って空港の外に出る。外では迎えの現地ガイドのイムランが待っていた。彼から歓迎の挨拶にと、小さなバラのような

花を胸に差してくれたが、何か照れくさくてルートは違うが、同じ便で乗ってきて知り合った女の子にあげてしまった。そして、彼に誘導されワゴンに乗り、イスラマバードから車で30分位の距離にあるラーワルビンディーの高級ホテル「パールコンチネンタルホテル」に行く。今までこんな豪華なホテルは泊まった事が無かったので、このツアーに参加して本当に良かった。宿泊代は一泊シングルで3300ルピー、ダブルで3800ルピー、朝食付きであった。

8/17。4:30起床。ホテルを、早朝6:10に出発。タウンエース(トヨタ車)で一路チラスへ向け、カラコルムハイウェイをひた走る。私は、今までカラコルムハイウェイとは高速道路みたいな感じの道路かなと思っていたが、実はハイウェイのハイとは“早い”という事では無く“高い”という事でカラコルム地帯の高い所を走る道路という事だった。道は一応舗装してあったが、谷間を切り開いた道は、凸凹が目立つ道だった。

今回のパーティは全員バキスタンは、初めてであり話もしやすい。しかし私以外は、色々な所へ行っているようで、モンゴル、ケニヤ、チベット等の話を聞く。特にモンゴルのバオでの生活や、ケニヤのマサイマラ

国立公園、マサイ族とか、食生活の話なんか面白かった。高橋氏、福永さんとも感じの良い人で、色々な話をしているうちにすっかり打ち解けてきて、これからの旅も楽しくなりそうだ。

ワゴンでの移動で感じたのだが、パキスタンの運転手、特に我々の運転手は運転がうまいのか？、それとも暴走族あがりかと思うぐらい過激な運転をする。昔読んだ「深夜特急」の中に出てくるバスの運転のようで、警笛を鳴らしながら、まるで

『邪魔だ。どけ！、どけ！、どけ！』

と言っているように追い抜くのだが、ドアミラーが当たるぐらいの間隔で追い抜くのはヒヤヒヤものだ。ある時なんか、前の車（軽のワゴン）が追い越そうとしているのに、その車を追い越そうとするは、前からは対向車が来るのに、何の躊躇いも無く警笛を鳴らして強引に追い抜く時なんか、足に力が入ってしまい、生きた心地がしなかった。

『解かった。もう俺の命はおまえに任せた。どうにでもしろ』・

と開き直るしかない。腹を決めると、結構色々な事が解かってきた。どうもこの国では車が優先らしい。ひっきりなしに鳴らす警笛も、色々な意味があるようだ。まずは、

『俺は（車）はここにいるから気をつけろ！』

と注意を促す時の警笛。追い越し時は、

『追い越すから邪魔だ。どけ！どけ！』

という威嚇の警笛。それと

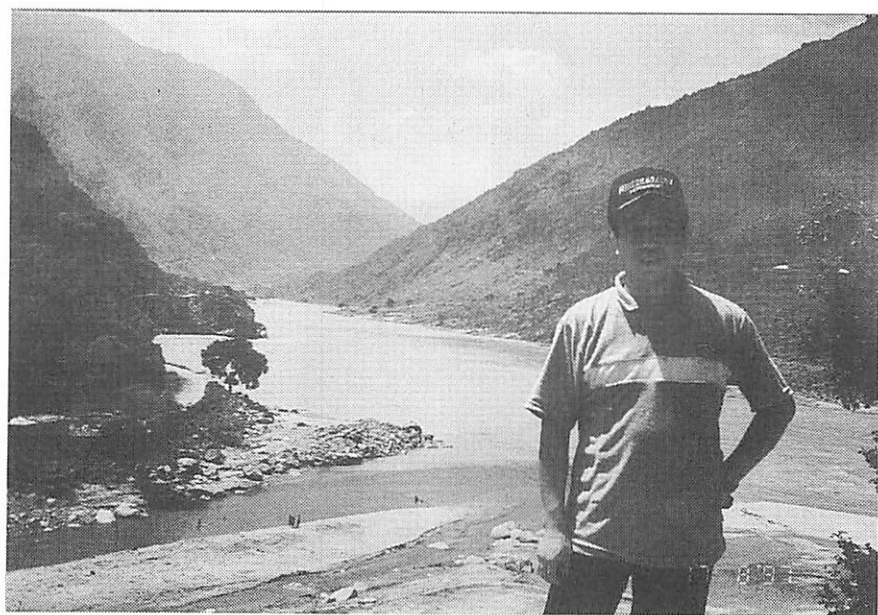
『これから追い抜きをかけるぞ、いいか？』

と問いかけの警笛。OKなら先行車が道を譲るというものらしい。しかし、追い抜き以外はとても紳士的で、他に車がない時はゆっくりと走っていた。道路に段差があったり、道がぬかるんでいる所はとても慎重でゆっくり確かめるように通過していた。思わず回りの景色を見ながら夢うつ状態になれる。そして、又スピードが上がったかなと思うと、必ず先行車がいるのである。まるで、

『何人たりとも、俺の前は走らせねえ』

てな感じになる。そして必ず追い抜く。多分、彼のレーサー魂がメラメラと沸き立つのかも知れないと、そんな事をみんなと話しながら行く。

途中、ハイウェイには何ヶ所か道にゲートが渡ってあって通れなくしてあり、そこには何人か警備兵（マシンガンを持っていた）がいて、検問をしていた。まるで関所の様である。ここでイムランが我々の書類（通行手形の様なもの）を渡してゲートを開けてもらっていた。日本とは違いハイウェイの警備は厳しいものだと思いながらその様子をみていた。道中はまだまだ長い。途中、お茶にしたり、昼食をとったり、景色を見たりの休憩を入れながら進む。昼食を取った町では、サブマシンガン、ライフル、拳銃等が無造作に販売している店を発見。お茶にしたレストランでは、駐車場に有った4WDの後部座席にサブマシンガンが置いてあって、やはり日本とは違い、銃はみじかに感じた。そんな思いの中、遠くからはコーランが聞こえ



インダス川をバックに生井

てきた。イスラム圏に来たという思いが、心身ともに感じてきた。そんな思いを感じながらハイウェイを進んで行く。

そして、チラスももう少しという場所で、我々は感動的なシーンと遭遇する。地平線が見える程の長い直線の道の彼方にナンガーバルバットが見えてきたのだ。夕焼けに輝く峰の上に月が出ている。荒涼とした広大な大地の前方の山間に月を従えたバルバット。私達以外誰もいない。微かな風の音以外何も聞こえない。回りの山々は赤く燃え上がり、まるで我々の到来を歓迎するかのようにであった。これは車を止め、写真を撮るしかあるまい。と、車を止め、車を降りて、思い思いにカメラのシャッターを押していた。キーンと、空気の澄んでくる感じがする。中村氏、高橋氏、福永さんの顔を見ると、夕日を浴びて赤々と輝いていた。世の中にはこんな景観もあるのかと、暫くその素晴らしい景色を我々だけで独占していた。そして、その光景を全身で感動し、余韻にひたりながら、今夜の宿泊地チラスのシャングリラホテルに19:10に到着した。ここまでの所用時間約13時間なり(実質10時間位だった)。ちなみにここまで、我々の乗ったタウンエースは二百台位は追い抜いただろ。

8/18。今日も雲一つ無い快晴だ。お陰で暑い事、暑い事。私は暑くて早く起きてしまったので、ホテルの周辺を一人散歩してみた。このホテルの直ぐ裏はインダス川の壮大な流れが見え、ホテルには何の木か名

前は判らないが、奇麗な赤ピンクの花が咲いていてインダス川の壮大な流れにアクセントを与える感じで、絵になる風景だ。悠久の川の流れを見ていると時間が止まったような気してくる。

散歩から帰って来ると、ホテルの庭にボーイ達がい

たので、
『グッドモーニング、トゥディ、イズ、ナイスディ』
と挨拶を交わしたら、

『お早ようございます』

と日本語で答えが返ってきた。ここ、シャングリ・ラホテルは、日本人のツーリストが宿泊する事が多いのだろうか?、日本語がここまで浸透しているのかと驚いてしまった。

チラス、8:10。タウンエースに全員乗車。いざ!フンザに向け出発。もう昨日の洗礼を受けているので、車に乗っていても不安はない。慣れとは恐ろしいものだ。荒涼とした川沿いの道を車は順調に進んで行く、BGMにパキスタンの曲(アップテンボな曲)を聞きながら楽しいドライブである。

途中、ギルギットで、トレッキングの機材と食料を調達するため立ち寄った。ギルギットにはイムランの所属するインダス・ガイドがあり、イムランは会社に行って準備するから

『パークホテルで、お茶にして休んでいてくれ』
と言ってテーブルチャージして行ってしまった。

お茶を済ませた我々は、ギルギットの町を散策しに出かけた。4人で町を歩きながら、物色しながらと、



月を従えたナンガーバルバット

ぶらぶらしながら通りを行くが、これが結構面白い。通りには、パキスタンの民族衣装を身にまといながら颯爽と人々が歩いている。そんな風景を写真に撮ろうと私は一人、通りを歩いてカメラを向けていた。すると、とても奇麗なショールの様な物をかぶって民俗衣装を着た12〜3才位の女の子達がこちらに歩いてきて偶然にアングル内に入ってしまう彼女達のアップの写真を撮ってしまった(この時は彼女達が近づいて来るのが分からなかった)。彼女達も自分が撮られたのが分かったらしく、驚き顔で立ち止まって二人して『今、私達、写真を撮られちゃったみたい。あなたも一緒に、あの人に、バラバラ〜』

と何やら興奮しながらしゃべっていた(これはあくまでも私の想像ですけどね)。もう一度カメラを向けると、一緒にいた連れの5歳ぐらいの男の子が、カメラに向かってポーズをしてくれた。子供は何処の国でも、お茶目である。そんな写真を撮りながら皆の所に戻った。

暫く歩いて喉が渇いたので、茶店の様な所に入り、一休みしながらコーラ等を飲む。が、ここは現地の人たちがたむろしていたので、一人で入るには一寸勇気がある所だった。少人数(4人)だから出来る訳で、今回の旅は本当に違った体験が出来て楽しい。

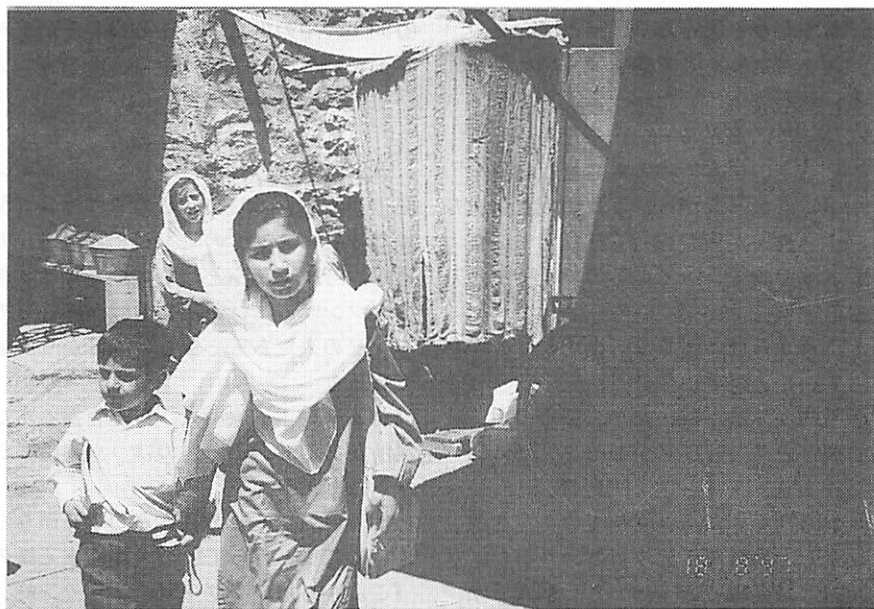
そろそろ戻ろうかと、来た道を帰るが、大通り(シネマ・バザール)では、鳥の丸焼きを軒先にぶら下げてある店。ガソリンスタンド。ナーンを焼いている店。ソフトクリーム売りの少年の店と、色々な店が立ち並びにぎやかであった。少年の売っているソフトクリー

ムが旨そうだったので、買って食べたが何か懐かしい味がした(実はこのソフトクリームは高橋さんにご馳走してもらった)。そして、移動の車の中で食べようと、バコーラ(かき揚げ天ぶらの様な物)と、サモサ(はる巻の様な三角の形の物)の二つを中村さん等が購入し、これらのスナック食品を持って、車に戻った。後で車の中で二つとも戴いたが、とても美味しかった。

準備も整ったイムランとホテルで合流し、出発する。相変わらずタウンエースは快調に飛ばして行く。この分だとフンザに早く着くんじゃないかと思ったが、やはり波乱の兆しが見えてきた。ギルギット〜フンザの中間位の山間部の溪谷で崖崩れが発生(この辺りはとても脆そうだった)。カラコルムハイウェイは寸断、この先は車が通れないとの問題が発生した。事故現場到着11:40。ここ迄かと思ってしまったが、流石イムラン、現地ガイド。トライブインの様な休憩所で、『お昼にして、ちょっと休んでいてくれ』

と言って我々にお昼&お茶の手配をし、対処方法を考える為に、現場に行ってしまった。

待つ事3時間半、ようやくイムラン登場。彼の対処方法とは、帰りに同じ道を通るので、車と運転手をここに置いて、事故現場を徒歩で向こう側に渡り、向こう側に用意した新しい車と運転手でフンザまで行くという方法だった。それじゃ行こうと、歩いて行くのかと思ったら、車で崖崩れ現場ギリギリまで乗せて行ってくれた。ガイド魂というのか、それともアトラスか



ギルギットの通りで…奇麗な少女達

らの報酬が良いからなのか、彼はとても我々を気遣ってくれた。

崖崩れ箇所は約200m位の幅で崩れていて、すごい数の人が集まっていた。秩序よく、崖崩れの箇所を川の方に下降し、アップダウンしている悪路を皆ハイスピードで通過するが、ガレ場で足場が悪く（所々大きな角材の橋が渡してあった）、下はインダス川がうなりをあげて流れているし、上からはいつまた崩落があるか知れないし、それでなくても小さい土砂崩れは起きているし、とにかくこんな時は日本人とかバキスタン人とかは無く、お互い助け合いながら走るように通過した。渡り切った所で、お互いに固い握手を交わした時は「人類みな兄弟」と心底感じた。

新しい車と運転手が変わり、気持ちを変えてフンザを目指す。が、変わった運転手も過激だった。渓谷のガードレールの無いくねくねした道を思いっきり警笛を鳴らしっぱなしでガンガン飛ばす。私達は、

『ああ、運転手が変わっても同じだな。でも彼の方が飛ばすかな』

という位で余裕で彼の運転を見ていた。途中、カーブがきつく回り込むように鉄橋が渡してある場所で、

『下を、谷底を見てご覧』

と運転手が言うので谷底を見てみると、ワゴンが落ち

て大破していた。イムランの話では、1ヶ月位前にここで、事故ったものだと言っていた。確かにカーブを曲がり切れなかったら、ガードレールが無い分すんなり谷底まで行ってしまうだろうと思い、

『こんな事故も、たまにあるんですかね？』

と中村さんに聞いてみたら転落事故も恐いが、以前やっぱりこんなルートで落石があり、それがバスの天井を突き破りその人の頭に当たり即死したという日本人がいたと話してくれた。バスの乗客で唯その人だけに当たり死んでしまった。と、よほど運が悪い人だと思ったが、ここでも無きにしも非ずである。バスに乗る際ヘルメットの着用を提案する。

渓谷の切り立った道も無事通り抜け、行く手に村が見えてきた。視界もぐっと開けてきたが、でもスピードは下がらない。そして、最も恐れていた事が起きてしまった。その村の入り口で停っている車と車の間からフラリと人と出てきた。

『あっ！危ない』

と思ったと同時に「キッー、キキキキキ〜」と、ブレーキの凄いい音。あまりの急ブレーキで、きな臭い匂いがする。車が止まると同時にフロントに人が当たった。私は運転手の直ぐ後ろに座っていたので、歩行者が車に当たる瞬間がまるでスローモーションでも見

ている様に見えた。しかし、歩行者も自分でも手で避けるように当たったので大した事はない様だった。良かった。本当に良かった。早速、運転手が降りたので、事故者の具合を見るのかなと思ったら、何と車のフロントを見ている。人が当たったので傷を見ているようだ。そして事故者に何か言っていたが、とても詫びている様には見えなかった。あと1メートル遅かったら彼は宙を飛んでいたろう。日本では考えられない事である。ともかく大事には至らなかったみたいだと戻って来た運転手に、イムランが何か厳しく注意していた様だったが、ウルドゥー語で言っているのによく解からなかった。でも最後は

『もう飛ばすな！これからはゆっくり行け！』

といった事を言っていたと思う。

今日は色々衝撃的な体験が続いたが、長寿の里、あんずの里、桃源郷と色々な呼び名があるフンザによくやく辿り着いた。19:15、フンザ到着。

まずは、ホテルまで行く。ここは元領主の王宮を改造したというフンザでも高級なホテルだという事だ。ホテルの中も雰囲気は最高級であった。もし個人で来たら、こんなホテルには泊まれないだろうと思うほど綺麗なホテルだった。

チェックインして気がついたのだが、他のホテル客

の姿が見えない。今晩は泊まり客はいないのかな？。お陰で夕食は優雅なホテルを貸し切ったように、我々5人だけのディナータイムになった。ロマンチックな雰囲気の中の夕食はとても良かった。そして明日のトレッキングに期待しながら、その雰囲気を味わう様にベッドに入り就寝した。

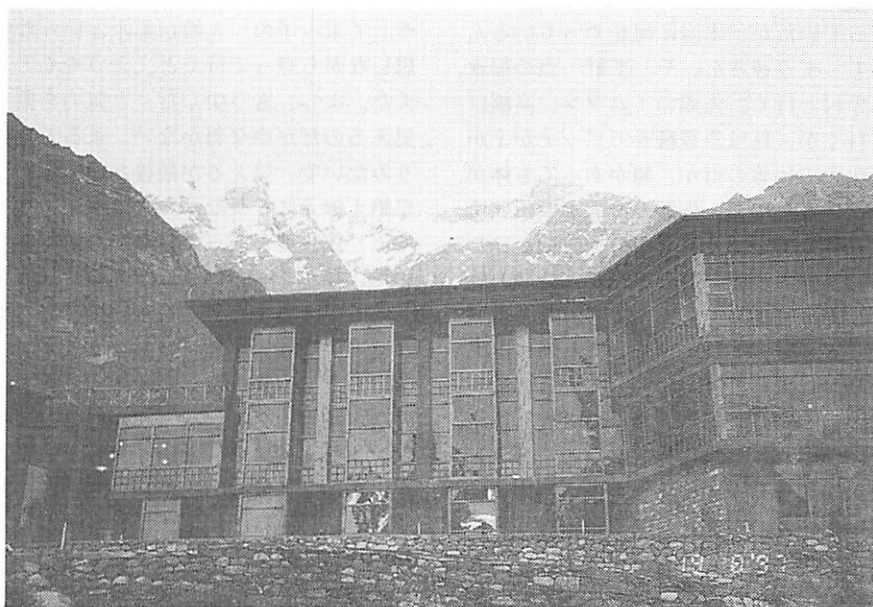
8/19。今日からやっとトレッキング開始である。私は早く起きてしまったので（一人で部屋にいても退屈なので）フンザの町をビデオ撮影がてら散歩に出かけた。今まで荒涼とした大地を走ってきたので、緑豊かなフンザの町は気持ちも豊かになって来るようだ。フンザの人たちも心優しい人ばかり。道端で撮影をしていると、

『おお〜い！、旅の人。写真を撮るんだったら、良い場所があるぞ。こっちのほうが素晴らしいビューポイントだぞ、』

と地元の気さくなおじさんが手を振りながら私を呼び、追いてこいと言って、その場所まで案内してくれた。

『ここからはフンザの町、ディラン峰、ラカボシ峰の眺めが一番最高なんだ。どうだい、素晴らしいだろう、旅の人』

『凄いですね、こんな庭先からディラン・ラカボシ、



ダルパールホテルにて

フンザ川が揺めるなんて』

『そうだろう！、そうだろう！』

と自慢げである。彼は自分の町を凄く誇りに思っているのだろう。ともかく写真を撮らせてもらって丁重にお礼を言ってホテルに戻った。

集合の時間なので山着に着替え、ザックを担いでロビーまで行き待つ。全員ロビーに集まり、少しして迎えのジープが来たのでホテルの外に出て行く。すると後ろから福永さんが私の山着姿を見て、

『今まで、ず〜っと私達を偽っていましたネ。昨日までとはまるで別人ですネ。やっぱり山の格好が似合ってますネ』

と声をかけながら近寄ってきた。

『ええ、これが本当の姿、自称放浪のクライマー。今までが偽りの姿なんですネ。ある時は会社員、ある時は旅人、果たしてその実体は、愛の登攀師キャスパー生井さ！』

と朝の会話を交わす。この頃になると恋人2人とも、色々冗談なんかも出てくる仲になっていた。

フンザ、8：15出発。ジープでディラン・ラカボシの登山口であるミナビンまで行く。美しいフンザの町、ウルタル峰、緑多い溪谷を後方に見ながら溪谷の切り立った道を行く。

ミナビン、9：30到着。ロッジで一息入れながらポーターが来るのを待つ。ポーター達が到着すると彼らは私達の荷物をどんどん持っていく。お陰でザックの中は水筒、行動食、カメラ、ビデオ、身の回り品ぐ

らいで、申し訳ない軽さだ。

準備していると私達が珍しいのか、現地の子供が近づいてきた。別に何かを要求する訳でも無いし、本当に興味があって近づいてくるのである。笑顔が可愛いく本当に無邪気である。それじゃお近づきにと子供達に福永さんが飴をあげ、一緒に写真を撮ったりして仲良くなった。何処でも子供とは直ぐに友達になれる。そんな子供達との交流を楽しんだ後、今日の目的地ハバクンドまでと、10：00に出発する。

リンゴ林の小路を左手に尾根を見ながら40分位歩いて行き、緩い上り坂を登ると、沢に出会った。この沢の流れが凄い勢いであった。何年か前に行った剣沢、剣大滝の様であった。迫力のある景観を鑑賞しながら休憩とり、これからの登りの為の身仕度を整える。橋を渡ると、いよいよ急登が現われた。乾燥していて何か埃っぽい登山道に行く。来る前は、頑張れば2日の工程を一日でベースキャンプまで行けるとあったので、何だ余裕だなど安直に考えていた。確かに頻繁に山に行っている本図、古山両氏、その他若手会員ならばそうだろうが、ゴースト会員の私では、この登りもしんどかった。なにせトレッキング中は、雲一つない快晴、当然鋭い日差し。乾燥した大地で、いくら水を飲んでも喉が渇く。まるで砂漠の中にいるような乾き。沢は流れているがその水は飲めない。私の水筒は1ℓ、足りなくなりそうでおもいきり飲めない等でベースが上らなかった事と、久しぶりの山登りの為だろうと解釈して自分を慰めた。

パーティの先頭はイムラン、次に高橋。この人はタフで、とにかく速い。フリーのライター（車関係）をやっていると言っていたが、本当に何をやっているんだろうかと疑ってしまう速さだ。そして紅一点の福永、次に私、最後に中村と行く。先頭のイムラン、高橋はドンドン登って行くが、私は急登続きでピッチが上がらない。木々は生えているのだが、緑があっても体が、この気候に合わないみたいだ。先頭の2人が所要所で、休憩を入れて待っていてくれるので大分助かった。合流後、少しの間は5人一緒にいるのだが、時間の経過と共に散らばってしまう。そしてまた合流し、一服といった事を繰り返して行く。そしてハバクンドも高度的（私の時計には高度計が備わっているのに）にそろそろかなという頃になると、後続の3人（福永、生井、中村）は、いつしか一緒に行動になる。暑さと喉の渇きで、木の日陰から次の日陰までと登高スピードは激減し、しゃくとり虫登高と命名される登り方だった。本当に情けない。会の皆にこの無様な姿を見られたら、きっと

『会の恥だ。そんな奴は今直ぐ、くびにしろ！』とシュプレヒコールが飛びそう。だが、そんな苦労を共にしたので、結束の固いパーティになった。お互いをきずかって水を別ち合ったり、行動食をお裾分け

会員は、やっぱり会員名簿から剥奪すべきだ！』との排斥運動が起きそうなのが怖い。自分が逆の立場なら、もう当然起こすだろうと思うからである。

夕闇も迫り、辺りはいい雰囲気になってきた。ここハバクンドには色々な国の人がやってきている。話し声も英語、フランス語、ウルドゥー語、日本語と飛び交っていた。目前の山波の峰の上の方は雪が冠っている。雪線は4000m位だろうか？、たぶん5000m以上の標高だろう。そんなに離れていない様に見えるのは、スケールがデカ過ぎて距離感が狂っているからだと思う。そんな風景に感慨無量になり、それを楽しみながらの夕食である。人は何か食べている時が一番幸せな時だと思う。メニューは相変わらず、カレーがメインである。カレーは嫌という訳じゃないが、毎日毎日では、流石に食は落ちてくる。まあ、タンドリーチキンやデザートは旨いけど。そんな中でも高橋氏は、一向に変わらない。どちらかというと増えているように思えるくらいだ。

夕食後、お茶を飲みながら、恒例になりつつあるイムランを囲んでの座談会は、私の最も苦痛のひと時だ。何しろ日本語ですらコミュニケーションは難しいと思っているのに、ましてこのひと時は英語オンリーになる。別にそういうルールではないが、私以外の3人は

したりと、家族の様になってきた。まるで兄弟の様に。さしずめ長兄を中村。次兄は私、生井。三男が高橋。そして末っ子の一人娘が福永といった感じだろうと、思いながら登って行くと、ようやくテントサイトが見えた。よし、もう少しだ、と気力を振り絞って行くが、見えるの다가中々着かない。まるで沼沢への最後の登りみたいで、見えるが最後が遠いという感じだった。息絶え絶えになりながらようやく着くと、そこは今までより放牧地とあって緑豊かな所であり、沢も流れていた。緑があるというだけで気分は清々しくなる。

15:40、ミナビン氷河の左岸の夏の放牧地ハバクンドに到着。早速テントサイトまで行き、お茶を戴く。もう、水筒は空だし、本当に喉が渇いたので至福のひと時だった。皆、『おかわり』と言って粉末のオレンジジュースの様な物を何杯か飲んでた。冷たい水に溶かして飲む。これがとても旨かった。トレッキングの良い処は、キッチンボーイがいるので、すぐに冷たいの飲物が出る事だ。物資はいくらでもある。何しろ我々4人に対し、ポーター、コック等の地元スタッフは10数名。ロバ2頭もいるんだから機動力は凄いと思う。荷物も殆どはポーターに持ってもらっている。こんな自堕落な事をしていると、また会の皆に、『ぶったるんで！。そんな会にも貢献しない超軟弱

英語が上手く、イムランも英語は上手い。当然、英語が共通語になる訳。これは暗黙の了解と言っていいたいだろう。その会話の中に入っていく訳だから、私は苦痛と言わざるを得ない。すっかり私は英語科の生徒になってしまった。言っている事を聞いて、意味を教えてもらったり、言い回し等も聞いて勉強。だんだん慣れてきて、一寸した事なら話せる様になった。ついでにウルドゥー語の講習会にも参加した。が、英語なら何とか分かるがウルドゥー語はちんぷんかんぷんである。

例えば1~10の数をウルドゥー語で言うと、『エーク・ドゥー・ティーン・チャール・パンチ・チェ・サート・アート・ノー・ダス』になる。そして、あいさつ、『お早よう』は、『スババヘール』といい、「こんにちは」は、『シャンバヘール』になる。本当の意味での「こんにちは」は、『アッサラーム』になるらしいが……………？。

また、「私の名前は〜です」との自己紹介は、『メーラー・ナーム・〜・ヘイ』と言う。ネパール語では、『メロ・ナーム・〜・ホ』と言い、何となく似ている。中村さんの話では、ネパール語も基をたどれば、同じ処（ウルドゥー語）から来ているのだろうと言っていた。



食後のミーティング風景・私の厳しい先生達

まずは、先生（イムラン）の後について声を出して数える。発声練習である。それをイムラン、中村、福永がアドバイス&チェック。結構厳しい先生達であった。私はどうも『スババヘール』と、『シャンバヘール』が、ごっちゃになっていた。発音もいまひとつ上手く出来ないの、指で喉を押さえて

『スババヘール』と、半ば冗談でやってみたら、これが何だか皆に、特にイムランに気に入られて、皆で、指で喉を押さえて『スババヘール』とやっていた。この後、挨拶は喉に指を当てて、交わすようになってしまった。これがもしパキスタン全土で、流行になったら怖い（そんな事は無いと思うが）。

イムランに、ウルドゥーを教えてもらったので今度は、高橋氏がイムランに日本語を教えていたが、またとんでもない事を教えていた。その言葉とは、『クソババー』、『クソジジ』、『クソガキ』と、いった悪い言葉である。悪い言葉は、やはり覚えやすいのかな。いや、イムランが覚えが早いのだろう。二人して笑いながら、その言葉の意味を確認し合い、また大笑い。傍から見れば、悪ガキ二人が何か悪巧みをしている様に見えた。そして最後に、『クルクルババー』といった言葉も教えていた。イムランもこの言葉が、凄く気に入ったらしく笑いながら『クソババー』、『クルクルババー』と連呼していた。それを聞いていた福永さんが高橋氏に、

『全く、何を教えてるんだか？、この人は！』

と言いながらイムランに、

『決して、日本人の女の人に言っては、駄目よ』と言っていた。全く、高橋氏も面白い人である。やんちゃ坊主がそのまま大人になった感じで、その保護者役が福永さんでな感じで見ていても良い雰囲気である。

その後座談会は延々と続き、英語もどうか雑談ならついていけるのだが、イムランが神妙にイスラム教についてとか、パキスタンの政治経済、部族間の争い、パキスタンの世界での位置等の話が續くと、もう私は目が点になってしまう。結構イムランは学識もあり、彼本人も、このひと時が気に入っているみたいだった。彼はとにかく話し好きで、話に花が咲くと寝るのも忘れて夢中になる。まあ22才じゃ楽しい盛りだから仕方ないと思うが。彼の話を3人は解かっている様なのだが…。私は???である。

『畜生！自分が…。何も分からない自分が嫌になって来る。自業自得であるが、自分が情けない』と、もう少し英語の勉強をしてくれば良かったと、この時ほど英会話が出来るようになるぞ〜と思った事は無かった。でもこの経験はある意味では、私には凄く勉強になったと感じた。

その後、明日の出発時間、朝食の時間も英語で打ち合わせをし、各自のテントに戻り、就寝した。

今回号は前編という事で、この辺で閉じたいと思います。次回後編は、ダガファリ（ディラン峰のベース

キャンプ地)の探訪。氷河の散策と展望。決死のガレ場の下降。イムラン宅訪問と波乱の旅は続き、海外山旅の楽しさを披露出来ると思います。

では読者の諸君、次回「パキスタン・カラコルム・トレッキング・後編」を乞う御期待！。

P. S…後日、福永さんより年賀状をいただいた。それには2人で2月に、ツェルマットにスキーをしに行くと書いてあり、また機会があったら会いたいとあった。会員以外と山に関してこんな仲間意識が生まれるのもトレッキングのいい処だと思う。

8/15

成田滞在(P I A遅延の為)

(生井 記)

剣沢遡行

1997. 8. 29~9. 1

パーティ L 高桑信一(浦和浪漫山岳会)、本図一統

29日晴れ。朝7時扇沢の従業員専用ゲートで川浦さんと待ち合わせる。川浦さんは既に関西電力を定年退職し、今は臨時職員として勤務しておられる。したがって川浦さんの車はトンネル通過許可証がついてなく、ゲートの係員にお願いして通過させてもらう。川浦さんにはいつも無理を聞いてもらって本当にありがたい。一番バスが出るのはまだ30分も後である。大町ルートから黒部ルートを通してインクラインまで30分位で着いた。

8/16

PK851・成田発(12:55)ーイスラマバード空港着(20:15)ーラーワルビンディ着(21:20)

8/17

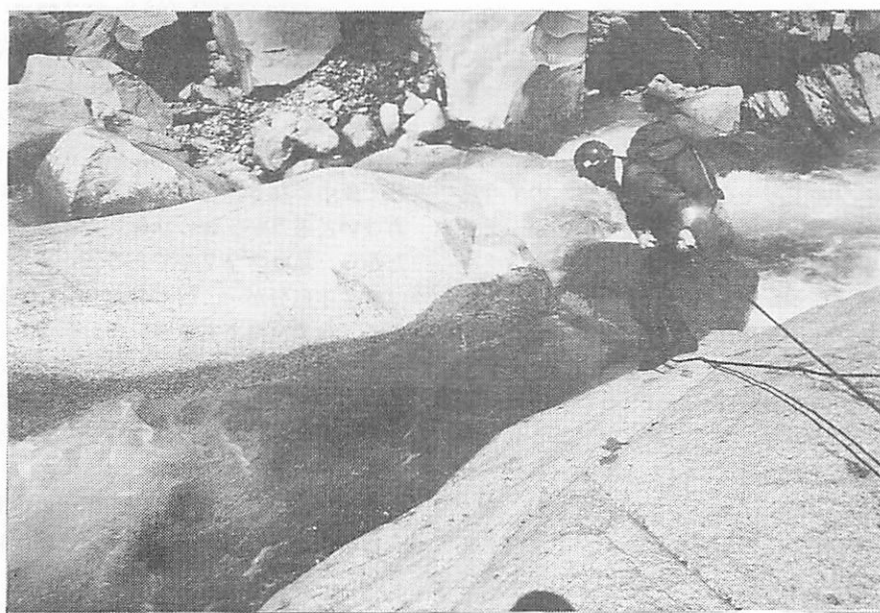
ラーワルビンディ発(6:10)ーチーラス・シャングー・ラホテル着(19:10)

8/18

チーラス(8:10)ー崖崩れ現場(11:40~15:30)ーフンザ着(19:15)

8/19

フンザ発(8:15)ーミナピン(9:30~10:00)ーハバクンド着(15:40)



第一徒渉点に行く。

は、いつも水量の多少を見る岩がある。しかし地形が変わってしまい目安にならない。でも見るからに水量が少ないのがわかる。しばしの休憩をとっていると、富山県警のヘリがかなり低空で飛んできてホバリングを始めた。なにか事故でもあったのだろうか、我々を観察しているようだ。うっかり手でも振ろうものなら遭難者と間違われるので、我々もただ突っ立って見ていた。そのうちヘリは去っていった。

登攀用具を身につけ、お互い声を掛け合い気合を入れて剣沢に向かう。別山北尾根から剣沢に降りる懸垂支点に、今年の冬のものらしいカラビナが残置されていた。やがて第一徒渉点に着く。地形が変わってしまい、前回チロリアンを張った大岩なんぞ何処かにいってしまった。流木を支点にザイルを使用する。第二徒渉点はスクラムで突破。第三徒渉点は大岩を飛び、左岸側の水流中を前進するも、今にも体がもっていられそうになる。二人で押し合い引き合いここを突破した。そして6m滝に着いた。左岸のスラブのトラバース点で、ここは大滝への関所とも言える所であり、これを登らなければI滝



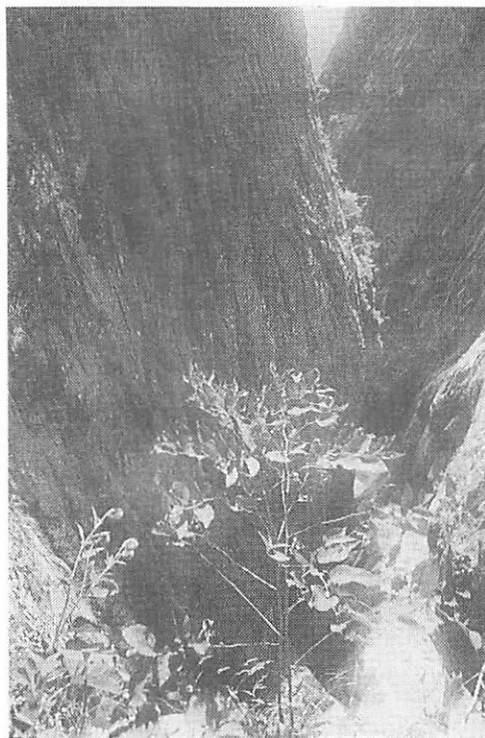
を見ることはできない。ここをすんなり登れなければ大滝登攀はやめたほうが良いだろう。続く二回の徒渉は問題なかった。大凹角ルンゼの水を汲み、取り付きに立った。昨日私は家を出るとき、お茶を飲んできた。これは難離けの茶という、私の田舎に昔からある風習である。私がするのは初めてのことである。すると高桑氏も、回りのこまごまとしたものを整理してきたという。お互いある程度の覚悟はしてきたのである。絶対生きて帰らなければと心に誓う。張り詰めた緊張感が全身に漲る。いよいよ登攀開始だ。一昨年残置したフィックスは、すでにズタズタに切れ足元に横たわっている。高桑氏とは、首尾よく今回成功したら、フィックスを外しに来ようと話し合っていたのだが、その必要はなさそうだ。1ピッチ目、凹角を登り左トラバース後フェース直上。ここを登るのは4回目なのにあまりの緊張感のためかルートを間違える。2、3ピッチ目は垂直ブッシュ。技術的に問題ないが年齢的な問題があり、垂直ブッシュは非常にシンドイ。ここにはフィックスが残っていた。4ピッチ目は浅いルンゼ状岩場をトラバースしてからブッシュ混じりのフェースを登る。このフィックスはなくなっていた。岩が露出している所は一冬過ぎると雪崩でなくなってしまうのである。我々は焚火のテラスの先で使うため、一部のフィックスを外し

緑の台地から見る急な岩稜

ながら登る。今回の登攀システムは、ブッシュとトラバースはお互い荷物を背負って登り、岩場ではトップのみ空身で登り荷揚げをする。セカンドは荷物を背負って登る、という方法をとった。4回目とはいえ51歳の体には相当つらいものがあり、バテバテで焚火のテラスに着いた。2年前我々がビバークした後は誰も来た様子がなく、テラスを整地しツエルトを張るころには夕闇が迫っていた。池田さんの作ってくれたカレースープは絶品であった。私は高桑氏のウイスキーまで飲んでしまい明日への活力となった。

30日晴れ。気になるのは空模様ばかりだが、今日も大丈夫のようだ。一安心である。焚火のテラスから水流上5mテラスまでは、フィックスを残さないと不足の事態にも戻ることにはできない(ボルト連打すれば別だが)。大阪わらじの二人は、躊躇なく懸垂ザイルを回収したと書いているが本当なのだろうか。結果的にはザイルを回収するほかに躊躇はしたと思う。パートナーか自分に何かのアクシデントが起きても、助けを求められないのだ。まあそれ以前に、こんな所

に救助隊が来てくれる確率は少ないが。確率は
どうであれ、私にその可能性を切ることはでき
ない。なんとしても退路だけは確保しておきたい。
昨日回収したザイルを引きずりながら登攀
開始。7mの懸垂からトラバース。トラバース
は人工といっても実際アブミに乗るのは7~8
回で、あとはバンド状をフリーで登る。かなり
緊張する場所である。一昨年のフィックスが残
っている。さらに2ピッチの振り子懸垂だが、
振りが大きく、本当に時計の振り子のように振
り込まないとスタンスに立てない。スリル満点
だ。ここに昨日回収したザイルを固定する。フ
ィックスの半分は今冬で無くなってしまうだろ
うが、トラバース地点は数年は残ると思われる。
続登者には場所がら許していただきたいと思う。
高桑氏はアクロバチックな格好でバチバチ写真
を撮っている。そのプロ根性たるや頭が下がる
思いだ。水流上のテラスはゴウゴウと激流の音
がこだまし、E滝とF滝の飛沫が降り注ぎ凄
い迫力だ。登攀中に水は得られないと聞いていた
が、高桑氏が懸垂で水面まで降り、水汲みに成
功する。戻りは勿論ユマーリングである。これ



で今日のビバークも安泰である。緑の台地ま
での1ピッチは凹角左のフェースを登る。ハー
ケン2本15分で登るが、はっきりいってここは
見た目より易しい。台地で休んでいると遥か上空をヘリ
が飛んで行った。台地からの岩稜は全体的には70度位
だが部分的には垂直である。私はフラットソールに履き
替え岩稜に取り付く。沢登りではなく完全に岩登りの世
界である。この岩稜だけでも立派な一つの岩登りルート
と言って良い。岩稜から見るD滝は素晴らしい。残置も
所々みかけるが、すべてチェックが必要である。1ピ
ッチ目、岩稜をほぼ忠実に登りテラスへ。2ピッチ目は右
下降トラバース後ルンゼを直上するが、トラバースの1
5mはランナウトするのでセカンドには恐怖のピッチで
ある。ビレー点のボルトは雪崩でなくなっておりボルト
を一本打つ。3ピッチ目、ルンゼを直上するか稜に出る
か迷うところであるが、残置ボルトのあるフェースを1
0m登るとテラスにでた。今日はここでビバークする予
定だ。時間もまだ早く、少しでもルート工作しておきたい
が、とにかく暑いので2時間ほど休憩する。涼しくな
ってから工作に入るも岩が脆くなってきた。3ピッチ目
の後半になるわけだが、テラスより左の凹角に取り付き、
垂壁を1ポイントの人工で越え2段になったテラスにで
る。正面の垂壁を右から回り込むように登り松の木でビ

緑の台地から見る大滝核心部

レー。4ピッチ目、松の木に立ってから上の垂壁を目
指すが、残置は見えるもののボロボロで手が出ない。
少し右手のボルトのある垂壁に取り付くもここは悪か
った。この上30m位はランナウトせざるを得ないほ
どボロボロであった。ここで落ちたら山本リンダの世
界である（イヤー古くて申し訳無い）。ザイルを2ピ
ッチ固定し下降する。支点にボルトを3本使用。下
に見える大滝上の雪渓は一晩中崩壊を繰り返していた。

31日晴れ。昨夜は雲が広がって心配したが、どう
やら今日も大丈夫のようである。昨日のフィックスを
ユマーリング。これだけでも本日の行程がかなり楽に
なった。昨日の最高到達点よりさらに上を目指す。5
ピッチ目、見るからにボロボロであるが、他にルート
が取れないのでそこを登るしかない。以前これと似た
ような壁を登ったことがあった。甲斐駒ヶ岳の岩場を
登ったときの岩と似ている。ここほど脆くはなかった
が、その時の経験が役にたった。手足四点に体重を分
散し、腫れ物に触るように静かに扱うほかない。ハー
ケンボルトは当然効かないので、途中にアイスハーケ

ンを一本打ち込む。落石がビレー中の高桑氏に雨のように降り注ぐ。いつ落ちてでも不思議の無い状態が続く。手にするホールド、スタンスは触っただけで崩れてしまう。祈るような気持ちでここを抜け、左トラバースしビレー。6ピッチ目、垂直チムニーを登ると傾斜が落ちた。やっと岩稜を登り切ったのだ。そのままザイルを伸ばし、左を見てみると黄色いテープシュリングが灌木に結んであった。おそらく志水君のものであろう。さらに20m行くと、大阪わらじの物と思われるシュリングがあった。我々もここから懸垂しよう。喉はカラカラで休憩するも水はなし。たばこを吸ってもまずい。遥か下には余るほどの水が、ゴウゴウと音をたて流れているのだから早くいきた〜い。最初の懸垂はブッシュで下が見えないので末端を結ばず下降をはじめた。5mも降りたろうか、下を見てびっくりした。45mザイルが空中を舞っているのだ。「空懸の振り子か、まるでサーカスみてえだな、ザイルの末端は結んでねえし、下まで届いてんのかな」独り言を呟きながらザイルを振ってみる。なんとか末端は岩に触っているみたいだ。スリル100%の空中懸垂は、次の支点となるブッシュまで45m一杯だった。連続懸垂はいつもの回収とセットを同時にやる方法



急な岩稜のルート工作



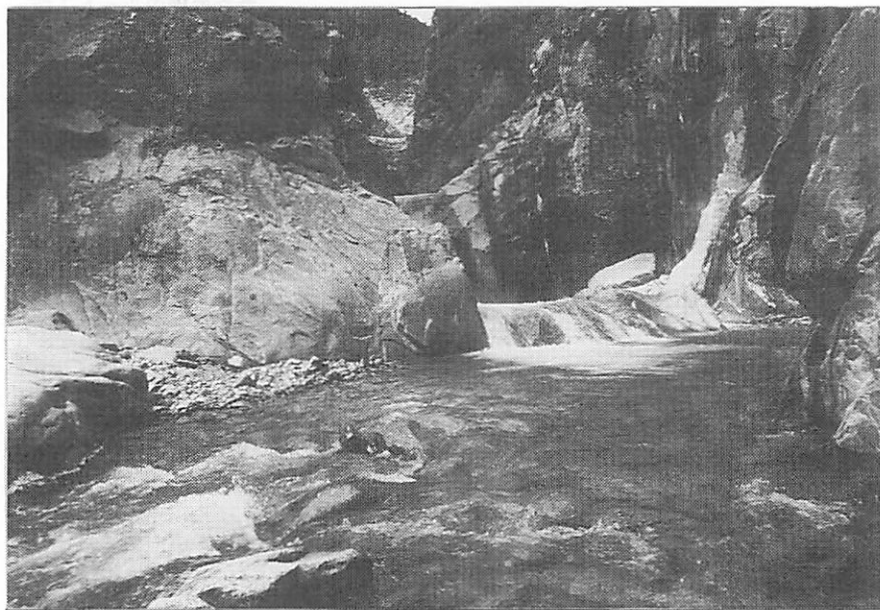
雪溪のクレバスを飛び越える。

で飛ばす。頭の中は水の事しかない。計5回の懸垂でC滝上に降り立つ。支点はすべてブッシュを利用できた。2人揃ってから剣沢の水で乾杯、コッヘルの水を一気に飲む。剣沢の水は飲用に不適なんてことは百も承知だが、とっても美味であった。B滝の飛沫で少々寒いがコーヒーを沸かして飲む。これは高桑氏の余裕からできる行動である。ここで渓流シューズに履き替える。高桑氏はここまですべて渓流タビで登ってきた。これは我々岩屋にとっては“すごい”の一言なのだ。B滝は右岸のナメナメバンドをトラバースするが、ホールドなくギリギリのフリクションのみである。ハーケン2本で快調にクリアする。A滝は釜が半分埋まっており左壁を直登すると、高島石盛氏が命名したという幻の神岩に着いた。それじゃ高桑さん、先ほどのナメナメバンドを“神々のトラバース”と命名しましょうよ。ヨーロッパの有名な大岩壁に同じ名前があるが、それを戴きましょうよ。

やっと大滝を足下にした。しかし、予想に反してどう見てもこの先易しくはない。いったいあの雪渓はどう越したらいいんだろう。今でも崩壊を繰り返し、氷片がガンガン流れてくるのではないか。それ以前に雪渓まで行くルートも見いだせない。この先は“交代だよ”と言って高桑氏の手タッチし、すべて沢の貴公子にお任せした。鳩首会談の結果、水線ギリギリに行くことにする。なせばなるもので、ハーケン打ってゴボで水中に降り、ショルダーで大岩に這い上がり、と、ボルダーリングの世界を楽しんだ。高桑氏は雪渓に上がる方法として私に2つ提案した。その1、左岸に徒渉しルンゼから上がる。比

較的安全だが徒渉が困難。その2、右岸の今にも崩れそうなSBの下を潜る。徒渉はないがSB崩壊の危険は大。私は水流を見て迷わず、その2を希望した。SB下を脱兎のごとく駆け抜けると簡単に雪渓に上がった。高桑氏の歩くのが速いこと速いこと、雪渓の安定した所で「高桑さん休もう」と弱音をはいてしまった。クレバスをジャンプで越すが、ケガをしてからすっかり苦手になってしまった。雪渓末端はシュルトになっているため木片とアイスハーケンを埋め込み懸垂する。ゴルジュを左岸から巻くと、昨年の偵察で見覚えのある地点にでた。地形は変わったがルートはそう変わらない。私が水の中にザンブリコしたり、高桑氏がカメラを水中に没したりと、いろいろあったが晴れ晴れとした気持ちで二股に向かう。夕刻やっと二股に着く。握手したまま私は「ありがとう」の他何も言えなかった。永かった。永い永い20年だった。感激して、歳甲斐もなく二人とも泣いてしまった。しかし空模様もあやしいし、いつまでもこうしてはいられない。早く真砂沢ロッジに行かなくては。ロッジまでは最後の力を振り絞って1ピッチで着いた。ロッジに着いて着替えをしていると雨が降ってきた。この雨は明朝まで続き強い降りであった。家に電話をし、最初に完登の報告をしたい人であり、そして一番喜んでくれる人であろう池上さんに報告を依頼する。薄暗い食堂で剣沢の話を酒の肴にビールを飲みながら、二人の祝宴は消灯まで続いた。

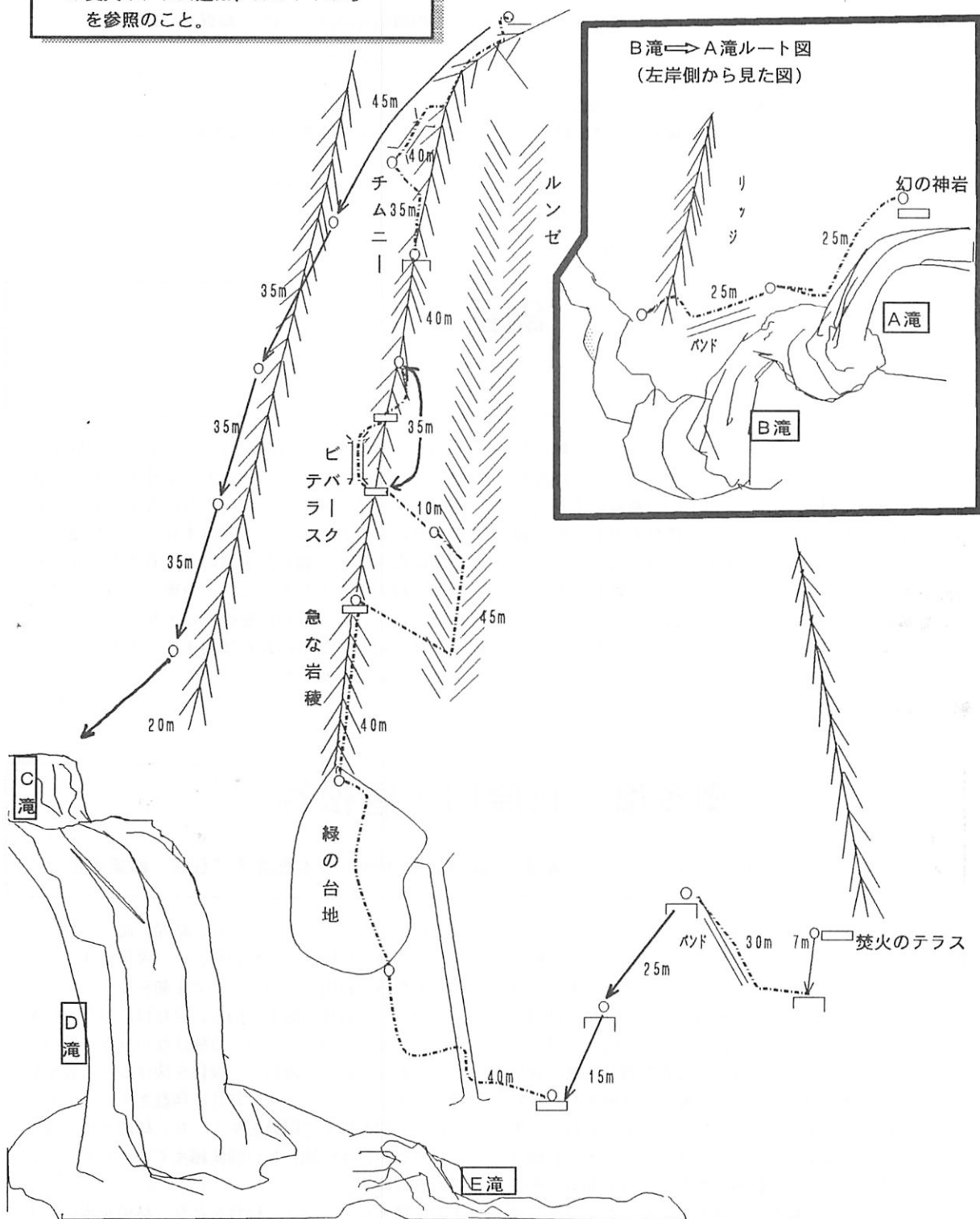
9月1日晴れ。今朝方までの雨も止み、ついている



C滝上の徒渉点

劔沢大滝ルート図

＊焚火のテラス迄は、R & V 19号
 を参照のこと。



ことこの上ない。時間はたっぷりあるので朝寝坊し、のんびりとハシゴ谷経由、黒四ダムに向かった。

8月29日

扇沢(7:00)―仙人平(8:00~8:20)―十字峡(9:42~10:36)
―焚火のテラス(17:54)

8月30日

焚火のテラス(6:22)―緑の台地(9:13)―岩稜上テラス
(14:16~16:00)―ルート工作後岩稜上テラスに戻る
(18:10)

8月31日

岩稜上テラス(5:50)―下降点(8:33)―D滝上(10:32)
―幻の神岩(11:45)―雪渓上(13:56)―二股(17:46)―

真砂沢ロッジ(18:52)

9月1日

真砂沢ロッジ(8:47)―ハシゴ谷乗越(10:28~11:05)
―内蔵助谷出合(13:40)―扇沢(16:37)

(本図 記)

*山本リンダの世界=どうにも止まらない。

鋸岳

1997. 8. 30-31

パーティ 古山正文

今回の山行は戸台口からマイクロバスで北沢峠に行き、そこから甲斐駒が岳に登り、西に派生する尾根をつたって鋸岳に登りそこから富士川の源流に下り富士見町に出る、というハイキングの様なもので、特に報告することはありません。水場は、登り初めの所(北沢峠とその少し登ったところの小屋)と終わりの富士川の源流に出たところの他には、駒が岳から1時間ほど下ったところにある6合目岩小屋にしかありませんでした。ピバークはこの小屋付近しかないでしょう。鋸岳周辺に2箇所ほどロープが固定されていました。

しかし甲斐駒が岳から向かうコースではその箇所は登りになるのでほとんど必要ありません。しかし逆方向にコースを取ったときは下りになるので、それを頼りにした方が安心かも知れません。この尾根は県境になっていて駒が岳を背にして右手が甲斐、左手が信州になるのだそうです。最後にこのコースでは秋には〇茸のおみやげを得ることができるでしょう。私も初めてこの〇茸を採集することができ、おいしくいただきました。

(古山 記)

奥多摩・日原川・唐松谷

1997. 9. 7

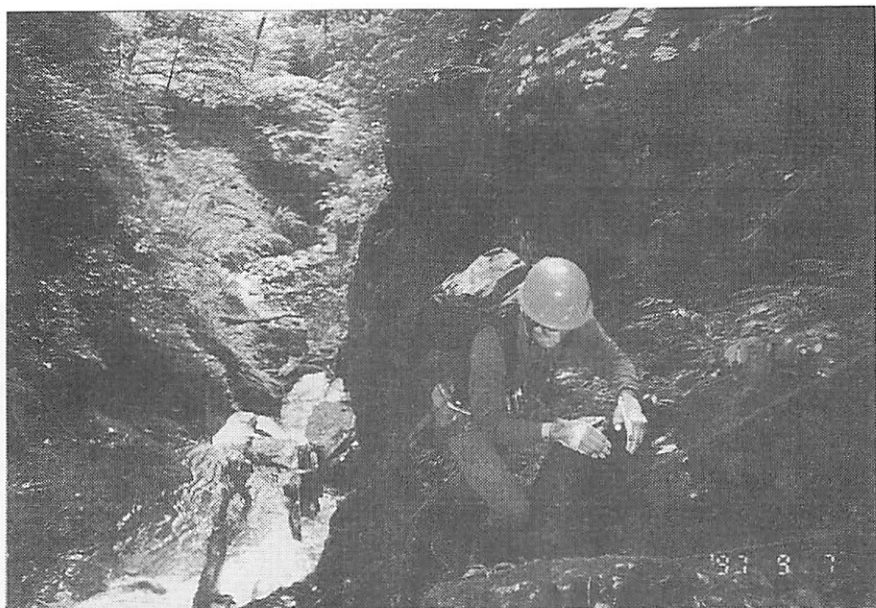
パーティ L本図一統、古山正文、中居康展、告広道、笹平孝、坂本恵美子、石塚、新美達也

9月の会山行は当初は巻機の手定めであったが、天気予報では日本海側の天気はかなり悪そうであった。下館の駐車場で検討の結果、比較的天気の良さそうな東京近辺の沢から、奥多摩の日原川唐松谷となった。日原林道に車で入り、富田新道入り口付近でテントを張って寝た。

翌日は、予想外に天気は良く、夏の名残りで蒸し暑かったため、沢登日和であった。日原川の本流をわたってすぐに唐松谷に入渓した。じきに小滝があらわれる。先頭の告さんが、滝壺を右から回り込み、そのまま右側の草付きを登っていった。結構いやらしそうである。そのあと、何人かが後を続き、自分の番になった。歩きながら、「なんか落ちそうだなー」と思っていたら、やっぱり滝壺に落ちた。水の冷たさに眠気もさめた。もう一度

取り付いたけれどもまたドボン。結局、滝の中を這い上がって何とか抜けた。次のF2の一段目はザイルを出して登る。古山さんがトップで左側を登り、そこからトラバース気味に滝上に出る。見た目は急だったが、ホールドはしっかりしていて危険はなかった。途中、ビトンあり。F2二段目、三段目を抜けると、展望が開けて明るくなった。次のF3は高巻きする。そのあとは、小滝を越えて川原を歩くうちに林道との合流点となった。F4は知らない間に越えていたらしい。ここで廻行終了。

きのこ談義などしながら昼食をとり、林道を歩いて下山した。歩行時間は短かったが、思わぬシャワークライミングをしたせいか、結構疲れた。帰りは奥多摩の



大滝を登る

駅で笹平さんが昔見たという幻の生物を見に行ったが、
文字通り幻だった。

出合(7:20)ー核心部上(11:06~11:46)ー車(13:03)

(新美 記)

黒部・下の廊下

1997. 8. 13~14

パーティ L 古山正文、笹平孝

丸山東壁に行こうということで、扇沢に向かった。
朝、起きてみると空は曇っていた。もし雨になったら下の廊下になることになった。

トロリーバスで黒部ダムに着くとすでに雨が降っていた。ここで暫く雨の様子を見ていたが、取り敢えず装備一式を持っていく事にした。下から見るとダムは迫力があって、その大きさがよくわかった。ここから川沿の道をひたすら歩いていく事になる。少し行くと丸山東壁へ行く出合の所に着いた。近くにテント場があって広さはテントが2~3張れる位であった。雨もまだ降っていたので、このまま下の廊下に行く事にした。ここはまだ長い道程の入り口にすぎないので、気合いを入れていった。途中で小さな落石があってヒヤッとしながら別山出合に着いた。ここは登山客でごったがえしていた。この辺りから岩をコの字型にえぐって作った水平歩道が始まる。こんな道をよく作ったなぁと感心してしまう。そのうちに雪渓があっこちに残っている所を通って行く。谷には雪渓のアーチ状の物や巨大な形の物があって、そのスケールがとても凄かった。暫く行くと十字峽に着いた。この頃になると雨は上がっていた。この辺りは川幅が狭いので、水が

濁流となって流れていた。剣沢にかかる立派な吊橋を渡ると近くにチロリアンが張ってあった。暫く進むとS字峽を過ぎて仙人ダムへ行く。ここから急登になって阿曾原小屋に到着した。早速テントを張って、ビールで乾杯をした。ここには、露天風呂があって、テント場から100m位下ったところにある。温泉に入ったら足の疲れも無くなってとても良かった。

次の日は、朝から雨足が強かった。樹林帯の中を進んで行くと、再び水平歩道になる。途中に小さいトンネルがあってヘッドランプを頼りに水溜りの中を歩いていったりした。暫くすると。右側に奥鐘山西壁が見えてくる。ハングだらけで眉毛ハングが何処なのか分からなかった。そのうち水平歩道は無くなって礫平へ下る道になった。

楽しみにしていたトロッコ電車は半分くらい寝てしまったので、もったいなかった。帰りは、電車を乗り継いで直江津経由で大町に戻った。

黒部ダムー十字峽ー阿曾原小屋ー礫平ー扇沢

(笹平 記)

鷹巢谷

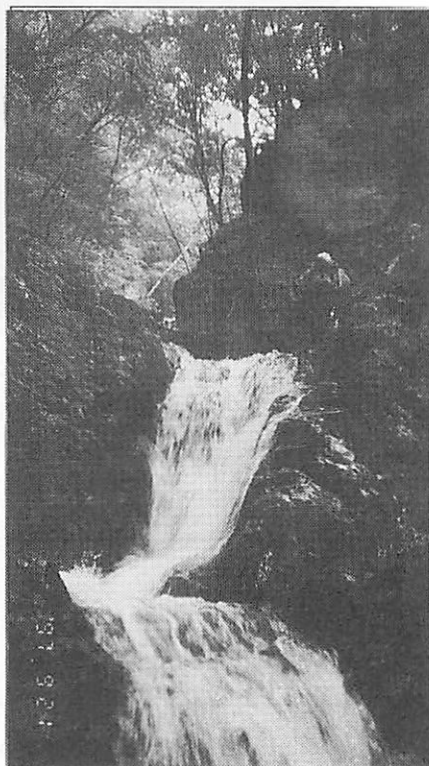
1997. 9. 21

パーティ L本図一統、紺野哲雄、他1名

9月20日。夜9時に土浦集合になっていましたが、僕は9時を過ぎてもまだ集合場所へ向かっていた。久しぶりの山行だということに遅刻である。相変わらずどうしようもない奴である。言い訳になりますが、道路は何故か渋滞してお巡りさんが交通整理をしていた。きっと何かの行事があったのだらうと推測する。とはいっても遅刻は遅刻である。言い訳までして本当にどうしようもない奴である。ついでに最近集会にも顔を出さずどうしようもない奴である。色々事情があって行けないのですが、連絡もせずどうしようもない奴である。また何かと言い訳をしてしまった。

そして9時を20分ほど回った頃ようやく集合場所に着いた。本図さんの車に小さくなりながら乗り込んで奥多摩へと向かいました。

今回は高速道路を使ったため時間は、早く着きそうなのですが遅刻した奴がいる。おまけに雨が降ってきそうな感じである。きっとこれも僕のせいだ！それでもまだ雨は降っていない。奥多摩について駐車スペースを探す。メインストリートから少し離れた所にスペースを発見、ここに車を停めていつものように朝を待つ。朝になると雨が降っている。「天気は、回復に向かっていでしょう」との本図さんの予報であるが、でもきっと僕のせいで雨が降る？ そんな天気の中、とりあえず40メートル大滝を目指す。後は天気次第で行動を決める事になった。雨は断続的に降り続いているようですがあまり感じなかった。1時間ほどで大滝に着いた。ここでロープをつける久しぶりである。ヘルメットをかぶる久しぶりである。ここはトップで行かせてもらったのですが依然として雨は降り続いている為ここで引き返す事になった。ここから左岸の道を下ったのですが、この道がとんでもなく行きと同じ位時間がかかってしまいました。でもお昼頃には車に戻り終了しました。



ねじれの滝を越す

車(8:03)―出合(8:33)―大滝上(10:13)―
車(12:00)

(紺野 記)



同行の関口氏

丸山東壁

1997. 9. 21~23

パーティ L 古山正文、告広道

内蔵助谷出合付近にテントを張り、丸山東壁に偵察に向かう。3連休の初日だけあってたくさん取り付いている。緑ルートには2パーティいた。時間も余り無いショートルートならということでも右岩稜に行ってみるが、ザイルが見えたので「ここも、いるのか」とガッカリするがどうも様子がおかしい。ザイルが壁の中間ぐらいでブラブラ揺れている。気味が悪いので、『行くの、止しましょうよ』と言ったが、古山氏は興味があるらしく行くと言って聞かない。上のテラスに死体でもあるとイヤなので、古山氏に1ピッチ目をお願いする。テラスに上がってみるとどうも事故があったらしく、ザックに装備が入ったまま落ちていた。ここに死体がないとするとこの上に？行きたくないが、いきがかり上、2ピッチ目は自

分になった。ヌンチャクもかけっぱなしになっていた。ところどころ使わせてもらい2ピッチ目終了。ビレイ点には変な状態でザイルがとりまわされていた。ここで登るのをやめる。今日は夕まずめにイワナ釣りをやる予定なので、急いで降りて行く。

内蔵助谷出合付近の黒部川で釣りをするが、何故か古山氏ばかりに釣れる。何と無く悔しい。刺し身とみそ汁で食べたがとてもおいしかった。

翌日、朝から雨。とりあえず取り付きまで行こうということになり向かった。しばらくすると雨があがったので緑ルートに取り付いた。壁は濡れていたが1ピッチ目でこずただけであとは人工ルートなので快適に登った。中央バンドに着くが雨宿りしていた分時間が押していたので休む間も惜しんで上

部岩壁に挑む。ここは、1ピッチでハングを越せるとルート図に書いてあったが、とても45mザイルでハングを越せそうにないので、ハング下で1度切った。古山氏は余裕でハングを越えていった。ヘッドランプを忘れた事もありハングを越えた所で終了。急いで懸垂にはいるが、中央バンドまで降りるのに45m目一杯で、おまけに空中懸垂でとても恐ろしかった。

翌日、朝から強く雨が降っていた。諦めて再びイワナ釣りに挑戦する。何故か今日は古山氏はまったく釣れず、自分にばかりかかってくる。しかしそんな嬉しさもつかの間、転んで釣竿を折ってしまった。

9月21日 取り付け(10:30)ー終了(14:00)

9月22日 取り付け(7:48)ー中央バンド(13:20)
ーハング上(16:45)ー終了(17:30)

(告 記)

実川 硫黄沢

1997. 9. 27~28

パーティ L. 本図一統、坂本恵美子、坂本昭裕

久々の沢である。家で準備をしてもどこか手際が悪い。しっかりザックに詰めたはずであるが、どこか不安が残る。待ち合わせの時間に若干遅れた事も、こんな手際の悪さがあったのかもしれない。ともあれ本図、坂本(副)、坂本(副)は、一路会津に向かった。僕は、坂本女史との山行は初めてである。集会の時には何度かお目にかかってはいたが、話した事は無かった。しかし車中で、見た目からは想像出来ないくらい活動的、活発的な人である事がわかった。百名山を目指して山に登り、既に8~9割は踏破してしまった事や山以外の時間はカヌーに挑戦し、激流が大好きという。

まあすごい。この人は、沢向きの人ではないか。うちの会にとっては、なかなかたのしい存在だと思った。さて檜枝岐までは結構とばしたが、下館からは4時間程かかった。12時頃に七人山荘そばの駐車場に到着した。

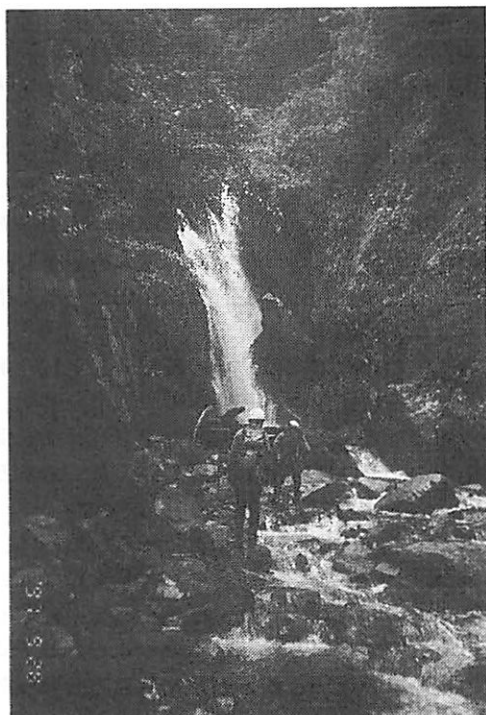
朝は6:00に起床のはずが5:00には目が覚めてしまった。檜枝岐の朝はひんやりとしていた。軽めの朝食をすませて入渓地点に向かう。小雨混じりの天候ではあるが全く問題はなかった。入渓地点は沼山峠への登山道との分岐で、そこで登攀具をつけた。今日は9月最後の日曜日で釣り人が沢山いた。



水量多き滝を直登する。

おかまい無しに（少しは遠慮しつつ）ザブザブと沢に入る。思ったよりも水は冷たくなかった。順調に沢を進んだ。久々であるせいかベースがつかめずやたら早かった。沢は特に悪場もなくなかなかの銘渓である。沢の中盤あたりから本図さんが竿をだして、釣りながら歩いた。沢の下流では魚影を確認できたが、上流は見あたらなかった。僕が、坂本（剛）さんに『もうそろそろあまり釣れない時間帯だしね。ちょっと無理かも』などと言った矢先に釣れた。良形のイワナであった。

遡行は特に問題となる場所もなく中盤から後半にさしかかっていた。核心部と思われる10mの大滝も左から高巻いてなんなく通過。続く7mで初めてザイルをだした。僕がザイルを準備する間も本図さんはイワナとの真剣勝負であった。そこもなんなく通過。最後に腰までつかるゴルジュでへつりの連続と、ルート図には書いてあったが、濡れずにこれまた難なく通過。あっけなく終わってしまった。その後は本図さんから竿を借りて僕と坂本（剛）さんの釣りの競演であった。が既に魚達は下流に下ったようであった。このころ車道を走る観光バスの音も聞こえてきた。本沢から左へほんの少しの藪こぎ



で車道に出ることができた。途中スギヒラタケの群生に出会った。感謝しながら拝むようにしてビニール袋へ入れる。もっと探せばたくさんキノコがありそうである。この沢はゆっくりと紅葉を楽しみ、山の幸にあやかるにはうってつけの場所だと思う。ゆっくりと釣りをして、キノコも探せる余裕が必要だと思った。

車道に出て御池経由七入行きのバスを拾った。意外にバスは空いていた。御池もにぎわってはいたが、大したことはなかった。小雨混じりのはっきりしない天候の影響であろうか、帰りの車中は、サッカーの日本対韓国戦に一喜一憂させられた。おかげで眠気もなく運転することができた。5時過ぎには下館に到着した。夜はスギヒラタケの豚汁にビールで乾杯させていた。

七入山荘(6:54)ーバス道(11:20)ー七入山荘(12:38)

(坂本(剛) 記)

この滝は直登出来ず。



釧路大滝を終えて

小学生のころ文部省推薦映画鑑賞とかで、学校から集団で“マナスルに立つ”という映画を見に行った。それは日本人がマナスルに初登頂した記録映画であった。私はいわゆる終戦子で、その頃は誰もが貧しかった。栄養失調の子供もいたくらいだから、ロクなもの食べていなかった。腹一杯食べられたが、おかずは粗末なものだった。そういう時代の、あまり良いニュースのなかった頃の日本人の快挙であった。頂上で日の丸を振る姿を見て、山登りって格好いいんだなあと感動した。

釧路大滝の存在は高校一年の時だったか読売新聞で知った。それは鷗翔山岳会が幻の大滝を解明したという記事であった。私は強烈なインパクトを受け、その記事を切り抜き何度も何度も読んだ。もちろん山のヤの字も知らない頃である。

当時アマチュア無線に興味を持っていた私は、本屋に無線関係の本を買いにいった。本を探していたところ山の本が目に入った。私はそれを手に取ってみた。立ち読み後なんと私は無線の本を買わずにその本（山登りの準備と技術⇒元文社刊）を買ったのだった。その本を食い入るように何度も読んだ。山

を登ったこともないのにハイキングの欄には興味がなく、なぜか沢登りと岩登りの所ばかり読み返した。登山経験ゼロなのに、たくさんの登山用語を覚えてしまったのである。初心者向きの沢として丹沢の葛葉川本谷、熟達者向きとして谷川岳マチガ沢シンセン沢左俣が紹介されていた。高校二年の夏休みに友達と山にキャンプに行く話が持ち上がった。私は行くんだったら黒部に行きたいと言い張った。その時の担任の先生はいわゆる山屋で“夏休みに山とかキャンプに行く奴は俺に相談すること”と前以て言われていたので、その話を担任にしたところ、黒部は入山禁止でだめだという。なるほど登山地図を買ってみると、黒四ダム工事のため下の廊下付近は危険地区と立ち入り禁止になっていた。それなら丹沢だと、一週間に渡り神ノ川から玄倉川、そして水無川と沢を登りまくる計画をたてた。山を登ったこともなければ装備も全然ないのにである。知らないということは恐ろしいことである。当然担任からOKの返事がもらえる訳がなく、この計画もボツになった。

18歳で東京に出た私は某ハイキングクラブに入

会した。なぜ山岳会に入らなかったかと言えば、当時東京農大死のシゴキ事件があった頃で、山岳会とか山岳部は封建的なイメージが強かったからである。ハイキングクラブの山行は、当然であるが釧路大滝を夢見ていた私には物足りなかった。しかたなく友人を誘い三ツ峠、奥多摩、鷹取山に岩トレに行った。また単独で丹沢に沢登りにでかけた。ザックにザイルやガチャ類を入れ、ヘルメットをふろしきに包んで（当時はこのスタイルが流行していた）、新宿発23時頃の丹沢号に乗るのが嬉しくてしょうがなかった頃である。この頃になると釧路大滝は自分の手に届く所ではないことがわかっていたので、目標は谷川岳マチガ沢シンセン左俣であった。

人形町に“たにがわ”という山の店があった。学生だった私にお金があるわけがなく、たいした物を買ったこともないのに、店の主人はいろいろな山の話聞かせてくれた。特に印象深かったのが冬の甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁の話だった。私はその話が聞きたくてちょこちょこ顔をだしていた。あるとき主人が「本図君、自分達だけでやっているのは危ないから何処かのクラブに入ったほうがいいよ。俺たちも

ACCJというクラブをやっているんだが入らないか」と誘ってくれた。単独や友人との山行に限界を感じていた私は、ACCJに入会することにした。20歳の時の10月であった。ACCJは私が心配していたような封建的な会ではなく、和気藹々とした血気盛んな集団であった。初めての集会で、水島さんに「君の目標のルートは何処だい」と聞かれ、私はミエをはって「一ノ倉南稜です」と言ったら、目標が小さいと笑われたのだった。自分としてはミエをはったつもりだったのに以外な返事であった。入会したその月に谷川岳山ノ沢V字岩稜右ルート、正月に鹿島槍ヶ岳赤岩尾根、5月に穂高屏風岩東稜と大スラブ、その一週間後に谷川岳一ノ倉沢コップ正面を登った。赤岩尾根では凍傷を負ったものの、ほぼ順風満帆のスタートを切った。目標としていたマチガ沢シンセン左俣も登り、岩登りに益々のめり込んでいった。そのころ私には良きライバルがいた。ヒマラヤで亡くなった中野融である。山行日数も岩登り技術も体力も彼にはかなわなかった。三年後入会した富樫直義も良きパートナーだった。富樫とは明星山P6南壁ACCJルート開拓を、中野とはヨ

ヨーロッパアルプスに行った。ドイツで中古車を買ひ、ネパールまで走った。次はヒマラヤへと一番油がのってきた25歳の時おやじが急死した。愕然とし、私の登山計画が崩れて行くのが目に見えた。当然実家に戻らなければならない。家には、おふくろと高校1年の弟がいた。突然一家の生活が自分の肩にかかってしまったのである。もう少し東京で修行しながら山に行くつもりでいた私には青天の霹靂であった。一年間365日のうち、元日を除いた364日仕事をした。当然山になど行けるわけがなかった。自分が親不孝したためにおやじが早死したのは承知していても、まいにち毎日がつまらなく感じていた頃であった。楽しみといたらマージャンくらいだった。剣沢大滝は遠い遠い存在になってしまっていた。

おやじの一周忌が過ぎた頃、宇井（現在シャモン在住）から一ノ倉沢ニルンゼへの誘いがあった。ニルンゼなら登ったことあるし、仕事オンリーの生活に疲れていた私はこれに乗ることにした。久しぶりに手にするガチャ道具。カラビナとカラビナが触れる音。ハーケンとハーケンが触れる音。すべてが懐かしく嬉しくて夜も眠れなかった。登攀の結果は雨のため中途敗退した。テールリッジを登るのが苦しくて、体力の限界を感じていた私には中途敗退は丁

度良かった。家に帰ってから敗退したのになぜか心は晴々としていた。一年間のストレスが全部吹っ飛んだ感じだった。おやじと俺とは違う。おやじは364日仕事をしたかもしれないが、俺は日曜祭日位は休んで山に行くんだ、と、この時決心したのである。この日以来マージャンをビタリとやめた。

翌年（昭和48年）ACCJ茨城結成、3年後のヒマラヤ遠征計画をぶち上げる。この頃、剣沢大滝のことが再び気になりだしてきた。翌49年、私は黒部に赴いた。もちろん大滝を登りに行ったのではない。少しでも黒部に接したくて行ったのである。十字峡に泊した私は、本流の濁った水とは対照的な、コバルトブルーの鮮烈な流れの剣沢に益々惚れ込んだのであった。

昭和51年のヒマラヤ遠征も無事終り（登頂できなかった）、いよいよ剣沢を的の中に入れたようになってきた。しかし、ヒマラヤの隊員達は仕事に追われ、剣沢大滝に付き合ってくれる相棒はなかなか現れなかった。昭和53年の頃の秋、単独で剣沢に向かった。もちろん登りに行ったのではなく、大滝が見たくてである。しかしこの時は天候悪く、十字峡までも行かず引き返した。少しでも黒部の岩に馴れようと丸山東壁も登った。昭和56年、東京岳人倶楽部

にいたことのある所が入会してきた。彼は経験実績とも申し分なく、この話を持ち出すとOKの返事が返ってきたのである。早速、大滝を44歳の時単独で登り、当時池田市に住んでいた池上さんに手紙を出し情報をもらった。この後、池上さんとの文通は10数回に及んだ。

昭和56年8月初旬。ついにアタックの時が来た。日電歩道が開通する前の黒部本流の雪渓状態は非常に悪く、何回かザイルを使用した。同時期、下の廊下に入った単独行の人は、この時行方不明になってしまった。十字峡からの巻道も分からず、とんでもない所を下降し剣沢に降り立った。剣沢の流れを見た私は呆然とした。今まで経験したことのない水量である。正直恐怖を感じたほどであった。剣沢平までの2回の徒渉は困難を極めた。滝見沢出合付近の本流上には、今にも崩壊しそうな巨大なスノーブリッジが架かっていた。右岸の大高巻から真っ暗な雪渓の下を潜って本流に降り、所の決死のジャンプと泳ぎで、ついにI滝の下に達した。しかし、I滝滝壺のゴウゴウとした流れには手も足も出ず戻るより策がなかった。翌日から天気が崩れ、雨の中、下の廊下の悪い雪渓を黒四ダムに行く気力がなく、樺平から富山に出ることにする。仙人平から強引に黒部

上部軌道に乗せてもらい下山した。この失敗で、剣沢は沢登り技術を身につけなければ登れないことを身にしみて感じたのだ。これをきっかけに私は沢登りを目指すようになったのである。それも標準タイム一泊の所は日帰り、登攀要素の高い沢に多く向かっていった。この頃の私は、かなり強行な山行をしていたように思う。現OBの広瀬は、私と一緒にいくと殺されてしまうので行きたくない、とまで言い出す始末であった。

昭和62年5月。2回目。この年の夏に再び剣沢にアタックするため偵察に入る。メンバーは生井と高田と私である。目的は緑の台地までのルート工作であった。二日目のアタック時、雪渓に前日にはなかった新しい亀裂を見つけた。生井にストップをかけ、戻れと指示し10mもバックした時、大音響と共にその雪渓が崩れ落ちた。危機一髪であった。登路を断たれ、この偵察も失敗に終わった。この時、テントを訪ねてきた若者がいた。志水君である。

昭和62年8月。3回目。メンバーは所と生井と私である。沢登りの山行を重ねてきたせいか、水にもだいふ馴れ、剣沢平までの徒渉も順調にいった。しかし、6年間のうちにおおきく地形が変わり、前回ボルトを打ってアブミを使用した所なんか足元に

ある。ルートにする予定の大岩は水を被っており、手が出ない。何処に登っていいかわからず、I 滝下までも達することができなかった。この時同じ目的で紫岳会も入山していたが、やはり前進できず敗退していった。黒四ダム下で休んでいると、気の良さそうなおじさんが隣に腰をおろした。関西電力に務めている方で、話が弾み黒部ルートを車で案内してもらおうという、とんだプレゼントを戴いてしまう。この方が川浦さんで、以後ずっとお世話になることになるおじさんであった。帰路、所がつぶやくように言った。「本図さん怖いのだ。俺、敗退と決まった時正直ほっとしたよ」と。この時所は結婚していた。この言葉を聞いたとき、私はみんなに悪いことをしていたなと感じた。私だって怖いのだ。ただ私は、怖いより登りたいという気持ちの方が強いだけなのだ。自分の夢を押し付けていたことを後悔した。もう所を誘うことはできないと悟った。その後生井も一ノ倉で転落負傷、復帰したものの椎間板ヘルニアになり、私はパートナーを完全に失ったのである。この年の10月、志水君は遡行に成功した。正直言って羨ましい気持ちはあまりなかった。その頃の私は、あるポリシーを持っていた。10月になれば水量が減ることは百も承知していたが、私は夏に登

れて行くから一緒に行かないか、と誘われる。私は黒部と聞いただけで嬉しかった。アシスタントとして同行させて戴いたが、深瀬さんの増水した沢の徒渉技術は素晴らしいものがあつた。しかし、飛竜峽手前のジャンプで自分の不注意により、左踵骨を粉碎骨折してしまい、富山県警のヘリで救出されるという事故をおこしてしまう。この時来てくれた救助隊の隊長は、剣沢を初めて完全遡行した高島石盛氏であった。多くの方々に迷惑をかけてしまった。高島氏の顔を見ながら、これで剣沢大滝どころか、私の登山生命が終わったことを覚悟した。

一カ月も過ぎたころ、曾てから“俺は剣沢大滝に登るまでは山をやめない”と豪語していた手前、やるだけの努力はしてみようと思うようになった。自分でメニューを作り、毎日サウナに行きリハビリに励んだ。素っ裸でオイッチニオイッチニと、チンチンをブラブラさせながらやっていたのだから、他のお客は変な奴だと思っていたに違いない。私の病院はサウナであった。リハビリを兼ねて茨城の低山を歩き回った。山行中の痛みは相当なものだったが、剣沢を恋する気持ちはそれを上回っていた。努力の甲斐あって山行中鎮痛薬は離せないものの、なんとか山に復帰できるまで回復した。

りたかったのである。例えば、谷川の滝沢リッジは冬登ることに価値があるわけで、夏登っても価値はない、と同じ考えであった。池上さんには、俺は水量で敗退したのだから、水量のない時期はねらいたくない。その多い水量を突破して登りたいのだと、いつも言っていたものである。それで登れないでいたのだから、負け惜しみと言われてもしかたないが。

その2、3年前のある日、筑波山自然植物観察教室に参加した。その時上空を優雅に飛ぶハンググライダーを見つけた。その数カ月後にはハンググライダースクールの門を叩いていたのである。スクール卒業後、地の利を生かして毎日飛んだ。気象条件が悪い日以外は、それこそ昼飯も食わずに毎日飛んだ。ハングの資格にはA級、B級、C級、パイロットとあるが、パイロットまで取った。ある時、クラブ集会の山行報告を聞いていて、会の活動が停滞していることに気が付く。ハンググライダーは平日、日祭日は山にすれば良いと考えていたが、その頃になると競技会にもエントリーするようになっていたので、山行に影響が出始めていた。いかん、このままでは自分が作ったACCJ茨城がつぶれてしまう。これをきっかけに私はハンググライダーをやめた。

平成元年9月。深瀬さんより、柳又沢にお客を連

平成7年8月。第4回目のアタックメンバーは高桑氏、池田さん、大久保氏と私の4名。関東沢屋交流会席上で、高桑氏とたまたま席を隣り合わせたのがきっかけで、このパーティが生まれる。他にも関東沢屋の仲間で、剣沢と一緒にいきませんか、と誘ってくれた人もあつたが、日数が10日位だということで私はとても休みがとれなかった。高桑氏は日数を私に合わせてくれ、感謝しても感謝しきれないほど嬉しかった。なぜならば日数が少ないということ、それだけ成功の確率が低いということなのである。川浦おじさんの計らいで黒部ルート経由の入山となる。今までと違って今回は沢登りの専門家と一緒になので心強い。なるほど、徒渉におけるルートファインディングはたいへん勉強になった。けして水量は少なくなかったが、呆気なくI滝取り付きまで行ってしまったのである。これまでの我々はいったい何をやっていたんだろうかと思う事しきりであった。予定通り焚火のテラスまで偵察を完了する。

平成7年10月。5回目。メンバーは高桑氏、田中さん、小川さん、カメラマンの中村氏と私の5名。水量少なく徒渉は簡単であった。これ又予定通り緑の台地手前までのルート工作を完了する。久しぶりの黒部下の廊下は美しかった。

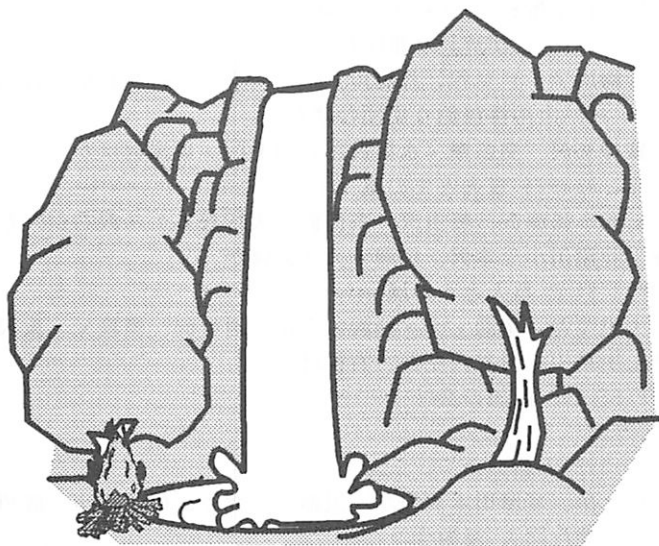
平成8年9月。6回目。完登を目指して高桑氏と2名で入山し、サポート隊は、はしご谷乗越経由で池田さん、大久保氏、谷澤さんの3名が真砂沢出合に入るといふ万全の体制で臨む。しかし、出発直前に私の隣家に葬式が出来、日程を変更せざるを得なくなり、雨にもたたられ失敗に終わった。この時泊まった仙人池ヒュッテは最高に気分の良い山小屋だった。

平成9年8月。7回目。最初偵察の予定だったが、天気も安定しているし、アタックに変更する。メンバーは高桑氏と私の2名。ついに宿願の完登を果たす。すべてが順調にいった。怖いくらい順調にいった。まず、一番バスが出る前に川浦おじさんがインクラインまで車で乗せて行ってくれたこと。我々のためにインクラインを特別運行してくれたこと。したがって9時半には十字峽に着いていた。水量が少なかったこと。天候が安定していたこと。平均年齢50歳というパーティがら、体力的には落ちていたかもしれないが、長年の経験をいかし、どんな場面にも落ち着いて対処できたこと。などなどである。すべてについていた。真砂沢ロッジに入るや否や、雨が降ってきた事など、このツキを象徴している。

7回目のアタックで、ついに完登を果たせたのに

は、良いメンバーに恵まれたことを忘れてはならない。高桑氏は最高のパートナーだった。高桑氏と登れなかったら、私は剣沢をあきらめるつもりでいたし、大滝ゴルジュを見られただけで満足はしていた。個人山行でサポート隊など出てくれるクラブは、そんなところにはない。浦和浪漫の結束の強さを見た。今回の大滝登攀は、言い出せば私であるが、山行は浦和浪漫の山行である。私は浦和浪漫の山行に参加させて戴いたに過ぎない。今回の勝利は浦和浪漫の勝利である。そのような山行に同行できた私こそ本当の果報者である。サポート隊の皆様本当にありがとう。欲を言えば、サポート隊のいるとき完登したかった。いない時登ってしまつてごめんなさい。それから川浦のおじさんありがとう。おじさんがいなかったらこの完登はなかった。資料を戴いた皆様ありがとう。浦和浪漫の皆様ありがとう。高桑さん、食当させてしまつてすみませんでした。そして最後に、所、生井、高田ほか、私のわがママを許して戴いたACCJ茨城の会員の皆様、本当にありがとう。

(本図 記)



《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.147, 1997, 7 B5 40P 浦和浪漫山岳会

奥多摩・シダクラ沢、叶津・新山峠・赤崩山・芳沢、日川・曲り沢、奥利根・利根川・芦沢・宝川、板幽沢
奥布引沢・布引沢・矢木沢西メーグリ沢・雨ヶ立岳・宝川、谷川・赤沼沢、奥利根・ヘイズル沢ほか

◎Rohman NO.148, 1997, 8 B5 56P 浦和浪漫山岳会

特集・大殺山集中、袖沢南沢小屋場沢、南沢本沢、小柴沢、高山沢、岩穴沢左俣、只見川・村杉沢右俣・
滝ノクサ沢右俣・コンニャク沢・中の沢、南会津・硫黄沢、大兜山・ジロト沢左俣、ヒツゴー沢、会津
・御神楽沢奥秩父・小若沢ほか

◎Rohman NO.149, 1997, 9 B5 82P 浦和浪漫山岳会

奥利根夏山合宿報告・割沢左俣、小穂口沢南沢、水長沢、一の沢、越後沢十分沢、水長沢鉛の沢右俣、
剣ヶ倉沢、滝ヶ倉沢、赤倉沢二の沢など、会津・黒檜沢俣金山沢、檜枝岐川上滝沢ほか

◎わらじ NO.496 1997, 7 B5 28P わらじの仲間

春の集中日光・三沢、上唐沢、田母沢、大事沢、荒沢、深沢、野門沢ほか

◎わらじ NO.497 1997, 8 B5 20P わらじの仲間

奥秩父・東沢釜ノ沢、川内・割岩沢、会津・袖沢南沢、武尊沢ほか

◎わらじ NO.498 1997, 9 B5 26P わらじの仲間

夏合宿特集・飯豊裏川矢沢、櫛ノ倉沢、長走川白滝沢、大滝沢、飯豊川都沢など、男鹿山塊・大蛇尾川
西俣、虎毛山塊・万滝沢ほか

◎逍遙 NO.74 1997, 7 B5 38P 逍遙溪稜会

春の集中・那須苦土川大沢右俣、左俣など、奥多摩・逆川、火打石谷、小常木谷、水根沢谷、尾瀬・
北岐沢、奥多摩・鷹ノ巣谷、越後三山・三国川黒俣沢日向沢右俣、虎毛山散策、大菩薩丹波川小
室川谷ほか

◎逍遙 NO.75 1997, 8 B5 24P 逍遙溪稜会

那須・井戸沢、丹波川小常木谷、丹沢・新茅ノ沢、奥鬼怒・黒沢赤岩沢、奥多摩・唐松谷、南ア・早川黒桂
河内二ノ沢、丹沢・小川谷廊下ほか

◎逍遙 NO.76 1997, 9 B5 40P 逍遙溪稜会

朝日・大檜原川、奥多摩・秋川矢沢軍刀利沢、奥秩父・大血川西谷石楠花沢右俣、丹沢・キュウ
ハ沢、二口山塊・二口沢小松倉沢、北ア・双六谷小倉沢、谷川・大源太北沢、鷲ノ首沢、朝日・
荒川東沢左俣、三面川竹ノ沢金堀沢、八久和川中俣ほか

◎Next! No.20 1997, 8 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん

会津・硫黄沢、北ア・青梅川アイサワ谷、丹波川トレーニング、百名谷から百名山ほか

◎Next! No.21 1997, 9 B5 28P 山岳溪流釣り集団むげん

野積川真川谷、会津・御神楽沢、奥多摩・水根沢谷、白毛門・東黒沢ほか

◎とまのかぜ No.56 1997, 7 B5 P24 童人とまの風

二口山塊・穴戸沢、二口沢小松原沢、鳴虫沢、糸滝沢、大行沢カケス沢右俣、左俣など、大台ヶ
原・シオカラ谷、会越・叶津川小三本沢、尾瀬・大赤沢ほか

◎とまのかぜ No.57 1997, 8 B5 P 童人とまの風

叶津川遅沢、大菩薩・大黒茂谷、尾瀬・ナメ滝沢、会津・道行沢、奥秩父・東沢釜ノ沢、二王子
・内ノ倉川七滝沢、摺上川烏川・滑谷沢左俣、右俣ほか

◎山紫水明 No. 1997, 7~8 B5 14P 山旅の会

丹波川徒渉訓練、守門岳ほか

◎山紫水明 No. 1997, 9 B5 24P 山旅の会

奥多摩・倉沢谷本谷、蛭ヶ岳、多摩川本流釣り、黒部上の廊下、伊予富士、鹿沼岩トレほか

◎溪遊 NO.96 1997, 7 B5 8P 溯行同人 溪遊会

湘南・大戸川吉祥寺谷、台高・中奥川戸倉谷、播州・阿舎利山引原川万ヶ谷、湘南・大戸川作ノ

芝谷、裏六甲・黒岩谷川地獄谷ほか

◎溪游 NO.97 1997.8 B5 8P 溯行同人 溪游会

台高・蓮川奥ノ平谷、比良・蛇谷ヶ峰灰処谷、若狭・耳川うつろ谷ほか

◎溪游 NO.98 1997.9 B5 8P 溯行同人 溪游会

鈴鹿・愛知川神崎神崎本流、三滝川東多古知谷、飯豊・玉川大又沢、台高・宮川堂倉谷本谷、播州・峰山小田原川ほか

◎すずらん通信 NO.196 1997.7 B5 16P 鈴蘭山の会

山の救急法講座参加報告、越後・御神楽岳湯沢高頭スラブほか

◎すずらん通信 NO.197 1997.8 B5 16P 鈴蘭山の会

南ア・奥沢谷遭難事故状況報告、奥多摩・逆川、二口山塊・大行沢ほか

◎すずらん通信 NO.197 1997.9 B5 12P 鈴蘭山の会

朝日連峰・岩井又沢畑沢、神室・大横川ザイル切断事件報告ほか

会報・記録集・報告書

◎天に羽ばたけ 1997 A4 131P 山登魂

平成8年11月16日、天城山系白田川川久保川にて遭難した篠原芳朗さんの追悼号1部、
事故報告 関係。2部、篠原芳朗さんの踏み跡。3部、篠原芳朗さん追悼。ほか

◎野良犬通信 Vol.4 1997.8 B5 P チーム野良犬

石川の青島靖さんの山行記録集。百武彗星の素晴らしいカラー写真5枚と百武彗星観測日記、沢登りに台湾・濁口溪山花奴奴溪～大鬼湖、白山・石徹白川初河谷～倉谷など20本。氷登りに足尾・松木沢、日光・雲竜溪谷。山スキーに銀杏峰～部子山、荒島岳など10本。岩登りに越中・下刀利赤壁などがある。犬たちの知恵にSetting SKI on your bicycleがあるが、雪国ならではのアイデアである。

◎年報とまのかぜ No.4 1997.9 B5 310P 童人とまの風

特集・越後五頭連峰の沢が17本、無雪期の山・越後、南会津、上越に22本。北海道、東北に13本。八ヶ岳、北アに3本。関東中部以西に23本。雪の山・頸城、越後、南会津、上越に13本。東北に12本。八ヶ岳、北ア、中ア、南アに10本。関東、中部に8本。新人紹介ほか

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

世の中色々なスポーツがあるが、その中で『どうして?』と一番判らないスポーツは何か?というアンケートでダントツ一位が冬山登山という事だ。やはり、冬山登山、岩壁登攀は一般市民には理解できないものだろうか?。まあ、やっている人間でも辛いラッセルは面白くは無いが……………。

この事は一概には言えないが、特に若い人たちに多い傾向だろう。その事を踏まえると、最近の山岳会が衰退傾向にあるのが判るような気がする。幾らロートル会員が山岳会の活性化を図ろうとしても、若い人との考えのギャップがある。今の人には山以外でも沢山の遊びがあり、又それらに付き合わない山以外の友人に仲間外れになるかも知れないと言う事もあるだろう。昔みたいに山一筋に打ち込めない時代なのだろうか。

元来、日本の登山とは信仰登山として限られた人々によって行なわれてきたと記憶している。或る点では登山とは孤独なスポーツであり、それは常に自分との戦いだと思う。なんでも同じだが、自分でやろうと思えば出来るし、嫌だと思えば止める事も出来る。すべて自分が思えばいいだけである。要するに各自のやる気なのだ。が、一瞬はやろうと思って継続していく事がこれが一番難しい。

この問題は、我国の農村部の過疎化、高年齢化、後継者不足との問題と合い通じるものなのだろうか?。



季報 [R&V] 第26号 発行1997年 夏

発行者: 鯉河仁志

発行所: ACC-J 茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者: 生井一男

印刷所: やさと印刷



岩壁，沢，冬山のクライミング集団